

---

# 塩谷物語(しおのやものがたり)

やいたもん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しおのやものがたり  
塩谷物語

### 【Nコード】

N7245W

### 【作者名】

やいたもん

### 【あらすじ】

現在の栃木県矢板市の平安時代末期から江戸時代初頭までの武士の歴史を描いた小説。

堀江氏五代の支配に始まり、塩谷氏、岡本氏と続き、滅んでいったしおのやものがたり塩谷武士の興亡史。

歴史的事実を基にした歴史小説です。



## 16歳と13歳の結婚

堀江頼純ほりえよりずみが、上野国じょうのくに（現在の群馬県）板鼻城主 原重房はらしげふさの娘やよいの弥生やよいと結ばれたのは保安4年（1123年）の事だった。この時、堀江頼純は16歳、弥生は13歳という若さだった。

それから3年後の大治元年だいがんねん（1126年）、2人の間に子供が生まれていた。名は月若丸つきわかまる。弥生は16歳になっていたが、当時の年齢は数え年であり、現在の年齢で言えば15歳。それで子供が出来て生んだのだから、その体の負担は当然大きなものだったが、当時はそれも珍しいことではなく、子供を生んで産後の肥立ちが悪く亡くなる娘も少なくなかったが、幸いにして弥生は病む事もなく無事子供を生んだのだった。

頼純は、まだ若い少年だったが、生まれた時から父はなく、母も間もなく亡くなり、すでに下野国しもつけのくに（現在の栃木県）の塩谷郡を支配する領主で、塩谷郡衙しおのやんが（塩谷郡の中心の役所）と堀江山城を居城とする有力武士となっていた。

その父は源義親みなもとこのよしちかと言い、源氏の棟梁とうたわれた八幡太郎義家はちまんたろうよしえの子で、頼純は父義親の死後に摂津国せつつのくに（現在の大阪府）の堀江の生まれだが、父が謀反人であったため、かの地に流されてきたのだった。

だが、謀反人の子供とは言え、名門の出の家柄。祖父の義家は、鎮守府將軍ちんしゅうしやうぐんにまで上り詰めた武士の棟梁である。鎮守府將軍とは、奥州おくしゅう（現在の東北地方）の支配者としての最高権威である。頼純がくだった関東には、義家を慕う者は多く、その孫である頼純は地元ちんの武士たちの協力を得て一郡の支配者となっていた。

弥生は、近隣諸侯には美しい娘として知られていた。わが妻に、わが子の嫁にという引き合いは多く、父の重房は、どこに弥生を出して家門の権威を高めようかと、そのことばかり考えていた。

他方、頼純も源氏の出の者として、わが娘を嫁にという申し出が多かった。鎮守府將軍の孫ということもあつたが、その凜々しさもまた近隣では有名で、将来有望視されていたのである。

そんな2人を結びつけたのは重房だった。頼純ならば、原一族の権威も高まると考えた重房は、2人を見合いさせたのだ。そして、頼純と弥生は、お互い一目見て惹かれあつたのだった。初めての出会い、頼純が15歳、弥生が12歳の時だった。

それから婚姻までは早かった。そして、第一子が誕生したのだった。

頼純は、月若の誕生を喜び、無事に生んでくれた弥生をますます愛して大切にした。弥生も、そんな頼純を心から愛し、2人は、相思相愛の仲睦まじい夫婦となっていた。

## 平穩な日々

頼純が支配する塩谷の地は、かつては祖父の義家や曾祖父の頼義も訪れた地であった。さらに古くは、征夷大將軍である坂上田村麻呂も訪れた地である。いずれも奥州征伐の際に訪れたもので、木幡神社や剣神社など、ゆかりの地も多かった。

その頼純の後見となっていたのが八田宗綱<sup>はつたむねつな</sup>だった。宗綱は、頼純の祖父である義家に従い奥州討伐に来て功を上げ、下野国の宇都宮の地を賜った藤原宗円<sup>ふじわらのそうえん</sup>の子である。この宗円は、のちに下野最強の戦国大名となり、伊予国<sup>いよのくに</sup>（現在の愛媛県）や豊前国<sup>ぶせんのかくに</sup>（現在の福岡県と大分県の一部）にも勢力を誇った宇都宮氏の初代となる人物で、宇都宮宗円とも呼ばれた。ちなみに、平成の世で内閣総理大臣となった麻生太郎氏は、この宇都宮宗円の子孫である。

宗綱は、宇都宮氏の系図では2代目とされる人物であり、下野の有力豪族である益子氏（紀党<sup>きとう</sup>：紀氏の出であるため）や芳賀氏（清党<sup>せいとう</sup>：清原氏の出であるため）を従えて、今や下野最大の勢力を誇る実力者となっていた。その宗綱は、頼純の祖父である義家の恩に報いるため、流罪人として下ってきた頼純を迎えて後見となり、頼純を塩谷郡の支配者としたのだった。

弥生の父である原重房が頼純を婿に選んだ理由の一つが、この宇都宮氏との関係をにらんでの事だった。宇都宮氏の勢力は強大であり、これを味方にする事で、自分がいる上野国での一族の勢力を拡大しようとしたのだった。

その辺の政治力学は、頼純もすでによく理解していた。弥生との結婚に政略的な意味があった事も理解していた。だが頼純は、その全

ての運命に感謝していた。

弥生という最高の妻を得られたからだ。

謀反人の子でありながら、源氏の子孫であるために、実力もない幼子の時から親の七光りに周りの大人たちに守られ、何の苦勞もなかったかのように少年でありながら一郡の支配者となり、妻を得た。どんな皮肉を言われても反論のしようもない恵まれた環境である。血筋に恵まれただけで…と妬まれても仕方ないが、頼純にしてみれば、武士として出世したことよりも、弥生という妻を得られただけで、それだけで良かった。それだけで、運命の全てに感謝したい思っていた。

頼純は、年を経て成長し、文武両道に長けた立派な武將に成長した。しかし、弥生の前ではまるで形無しだった。剣術では、もはや家臣のほとんどの者が勝てないほど頼純は強くなったというのに、弥生の前では威風堂々どころかおとなしくなり、声質も甘えたように軽々にして、発する言葉もたどたどしくなってしまう。

弥生「との、茶をお持ちいたしました。」

頼純「さ、左様か…」

堀江山城の館の庭、家臣たちとともに剣術の稽古をするとき、弥生が現れると、家臣たちもホツとするのだった。稽古の間は、鬼のように厳しい頼純が、猫のようにおとなしくなるからだ。

弥生「あまり、皆様をいじめないで下さいね。」

頼純「そ、そのような事はしてない。の、のう。」

頼純は家臣たちの方を見たが、家臣たちは、二重の意味で苦笑いだ

った。

そんな頼純には、周辺諸侯から側室の縁談の話も舞い込んでいた。後見となっていた宗綱からも、自分の娘を妻にするよう誘いもあった。しかし、頼純は、その全てを最初から断っていた。宗綱にさえも、これだけはと拒んだ。宗綱の娘を妻にすれば、原氏との家格や宗綱が自分の後見であるという関係から見ても、弥生が側室になり、宗綱の娘が正室になってしまうということもあったが、頼純にしてみれば、それ以前の問題だった。

頼純「私は、弥生以外の者を妻にするつもりはありません。」

宗綱の前でさえも、頼純は、きっぱりと言った。これには、宗綱も娘を妻とする事をあきらめざるを得なかった。

さて、この頃、宗綱の勢力は下野国だけでなく常陸国にもおよび、父から引き継いだ下野国守護職を背景にして、それを拡大しようとしていた。しかしながら、その勢力拡大を阻む勢力が北に生まれようとしていた。それは、那須である。

那須は、この時でこそ下野国の一郡として定着しつつあったが、かつては那須国なすのくにとして独立していたものであり、同じ下野国であっても、その風土や気風は一線を画していた。

その那須に同じ藤原の一族から、那須資家という者が那須の地に下り、天治2年てんじ（1125年）に神田城かんだじょうという城を築いて支配を固めようとしていた。名も、那須藤原氏ということで須藤氏を名乗っていた。

那須への勢力の拡大を考えていた宗綱にとっては、青天の霹靂へきれきな出

来事であった。勢力の拡大どころか、同じ藤原氏であるためか、容易に那須地方には手を出せなくなり、一方で、北部方面の勢力拡大の競合相手として脅威ともなりつつあった。

そして、その緩衝地帯として塩谷郡の位置づけが重要となり、頼純の塩谷郡支配の確立を急ぐ必要性にも迫られていた。

頼純と弥生が平穏な日々は、長くは続かなかったのである。

おりしも時は、平安の世が終わりを告げようとする時代であった。

## 頼純の野望

頼純の塩谷郡支配は、宗綱の助言の下に着実に進んでいた。

頼純が塩谷の地に下ってきた時、そこには、すでに山本一族という有力な支配者がいた。寛治3年（1089年）に山本家隆が宇都野の地に鳩が森城一（別名宇都野城）を築き、塩谷郡の支配を固めていた。しかし、この山本家隆は、頼純の祖父義家の家臣であり、義家によってこの地を与えられていたため、孫である頼純がやってくると、進んで恭順の意を示し、頼純の重臣となっていた。

それから頼純は、自らの有力家臣たちを塩谷郡の要所に配置し、その統治基盤を盤石とした。

関谷の地には、関谷左内重兼とその子、太郎兼光（又は兼通）を配置して田野城を築かせた。

長井の地には、長井次郎安藤太を配置して長井館（下長井館）を築かせた。

平野の地には、平野三郎兼虎を配置して平野館を築かせた。

岡の地には、岡四郎兼春を配置して岡城を築かせた。

泉の地には、和泉五郎兼重を配置して泉城を築かせた。

乙畑の地には、乙畑六郎兼房を配置して乙畑城を築かせた。

小入の地には、小入七郎重春を配置して小入城を築かせた。

山田の地には、やまだはちすけつつかねとし山田八郎兼利を配置して山田城を築かせた。

安沢の地には、あんざわくろつつかねもり安沢九郎兼盛を配置して安沢館を築かせた。

矢板の地には、やいたしゅうろうもりかね矢板十郎盛兼を配置して矢板城を築かせた。

いずれも青年や少年ともいえる若い武将たちであったが、頼純が信頼する文や武に長けた武将たちで、将来性を考えての配置であった。これらの武将は、のちに堀江十勇士と呼ばれる事になる。そして、これら10名の家臣たちを中心に、宇都宮氏の配下である紀清きせい両党に匹敵する最強の軍団を整備した。

特に頼純は、年も近かった事もあって、関谷兼光には強い信頼をおき、常に側に置いていた。年で言えば、兼光の方が3歳年下で、頼純は、実の弟のように兼光をかわいがっていた。そして、暇さえあれば、頼純は兼光を連れて狩りに出掛けていた。

その日は天気がよく、頼純は兼光を連れて堀江山に登り、山の上から北の方を眺めた。

頼純「今日は、狩り日和じゃの。」

兼光「左様で。」

左様で…と言った兼光の口元が軽くゆるんだ。頼純のそれは、いつもの合図だった。

頼純「では、那須を狩りに行くかの。」

兼光「はっ。」

それは、内緒で2人だけで狩りに行くという合図の隠語だった。他の家来たちと狩りに行くと、行き先が制限される事が多かった。他国の国境などで狩りをすると、他国の者たちといさかいが起こることもあるので、そうした身の危険があるような場所は避けられてしまふのだ。

だが、頼純にはそれがつまらなかった。もっといろんな場所で狩りがしてみたい。特に最近のお気に入りは、那須との国境あたりの那須野で狩りをする事だった。それは、兼光の居城である田野城に近く自由がきくということもあったが、那須の地にはある思い入れがあったのだ。「那須に…」ではなく、「那須を狩りに…」と言ったところに、その思いは込められていた。

頼純は、兼光だけを連れて堀江山城を出て、北に馬を走らせた。目指す是那須野の地。狩りに行くとは言ったが、狩りの支度はしていなかった。その方が家来たちの目を騙しやすいということがあったが、2人の今日の目的は、狩りではなく、那須の地を密かに見に行くことであった。

頼純「兼光！！ やはり最初は那須じゃのう。」

兼光「さようで。ここを越えていけば奥州です。」

頼純「うむ。」

頼純は、今は胸に秘めたる野望を兼光だけに語っていた。

奥州制覇。それこそが頼純の望みであった。

奥州は、源氏の因縁の地である。因縁は、頼純の河内源氏の祖である源頼信が鎮守府將軍に任命された時から始まる。

鎮守府將軍とは、奥州を支配する朝廷に認められた最高権威で、こ

れに任じられる事は、奥州の支配者を意味していたが、その実態は「支配」などと言う言葉とはかけ離れたものだった。権威としての鎮守府將軍の地位はあっても、実際に奥州を支配していたのは、地元の有力豪族たちであり、特に安倍氏の台頭が強く、支配と言うよりは、朝廷と地元の豪族たちとの間を取り持ち、良好な関係を保つための仲介役に過ぎなかった。ちなみに、この安倍氏の末裔が、平成の世に総理大臣となった安倍晋三氏である。

これに不満を抱いた頼信の子である頼義、つまり頼純の曾祖父は、鎮守府將軍になって奥州の地に赴くと、安倍氏討伐の兵を起こす。安倍氏を討伐して奥州を源氏の領地とし、奥州に源氏の一大王国を作るのが頼義の夢であった。いわゆる前九年の役である。単独ではこれに失敗するが、出羽（現現在の秋田県と山形県）の清原氏の協力を得て、安倍氏討伐に成功したが、これにより奥州の実権を握ったのは、源氏ではなく、これに協力した清原氏であった。頼義以降の鎮守府將軍には、3代も続けて清原氏が任命されたのだった。

その清原氏を討つべく兵を起こしたのが、頼義の子にして頼純の祖父である義家であった。義家は、清原清衡（きよはらきよむね）と協力して、清原氏を討ち、いったん奥州を平定した。後三年の役である。

この清衡は、元々は藤原氏の出であったが、家が滅びて、母が清原氏に嫁いだために連れ子として清原氏になっていたものである。だが、清原の血を引いていない清衡は、清原氏の中では不遇な扱いを受けて、清原討伐に加わったのだった。これが成功すると、清衡は藤原氏を名乗った。その後、清衡は、義家を裏切って奥州から追い出し、自らが奥州の支配者となった。いわゆる奥州藤原氏の始まりである。

その後、奥州は藤原氏によって盤石に支配され、源氏は奥州に立ち

入れなかった。

頼純の夢とは、その無念のうちに奥州を離れた祖父の義家に代わって奥州に入り、祖父を裏切った藤原氏を討ち、奥州を源氏王国とする事だった。その第一歩が、那須の支配であった。那須を制圧して北下野を制圧し、それを足掛かりとして奥州に攻め入る事を考えていたのである。

頼純「俺は、祖父のものであつたはずの奥州を必ず取り戻す。」

那須を狩る…その言葉には、そんな意味が込められていた。

## 武士誕生の歴史

平安時代は、藤原氏の時代であった。鳴くよウグイスと覚えた平安遷都に始まる時代が平安時代である。藤原氏は公家であり、平安時代は、公家の時代とも言えるわけだが、実は武士の創世記でもある。

武士の誕生もまた、平安京遷都により始まる。平安京遷都が行われた延暦<sup>えんりゃく</sup>13年（794年）、時の桓武天皇は、画期的な政策を実施している。それは、国の軍隊の廃止である。

日本の国軍の歴史は聖徳太子に始まる。聖徳太子が憲法十七条や冠位十二階など国家改革を進める中、それまで、戦の度に従う豪族を編成して都度軍勢を集めていた体制を改めて、国家直属の軍隊を創設したのに始まる。

だが、時の桓武天皇は、この制度を廃止して、健児<sup>こんでい</sup>と検非違使<sup>けびいし</sup>という制度を創設した。健児とは、郡司やその一族で構成された兵士で、検非違使は、今でいう治安維持のためだけの保安警察的な制度を創設したのである。しかし、その数はわずかに4000人程度。平安京と地方の役所を守るだけの組織に過ぎなかった。つまり天皇は、この時、軍事統帥権を放棄したのである。桓武天皇以降、その名前に「武」の字を配する天皇が現れなくなったのは、このためである。

日本人の多くは、終戦後、軍隊の保有を放棄した憲法を平和憲法と称して、これを前代未聞の事と勘違いしているが、軍隊の放棄は、すでに1200年以上も前に行われていたわけだ。

ただし、安全保障自体は放棄できない。外敵から侵攻を受ける可能性もあれば、内乱が起きる可能性はある。そのため、常設の軍隊は

廃止し、時の最高権力者である天皇が軍事統帥権を放棄する代わりに、有事の際は、臨時で軍を創設する制度を作り、新たな軍事統帥権者の称号を創設し、天皇は、その任命権者となったのである。その新たな軍事統帥権者の称号こそ、征夷大將軍である。

そして、平安京遷都のその年、最初の征夷大將軍が任命された。名を大伴弟麻呂おのおとものおとまろという。征夷大將軍というと、武士の最高権威と勘違いしている人が多いが、それは後世の事であって、武士が誕生する以前から征夷大將軍という制度は存在し、弟麻呂は武士ではない。

だが、この桓武天皇が行った改革こそ、武士が誕生するきっかけだったのである。

国が、軍隊を放棄したために民たちは、国が国民を守るという当たり前の事が受けられなくなっていた。そのため、自分の身を守るために、自ら武器を持ち、危険があった時は、自ら戦うしかなくなってしまったのである。最初は自警団的な程度のものであったが、やがて争いが起きるようになり、それはより強力なものへと変わっていった。

これが発展して誕生したのが武士であった。

後世、この武士が結集して幕府という組織を作り、日本を約700年に渡って支配するわけだが、軍隊を廃止して出来たのが幕府と言う名の軍事政権だったとは皮肉な話である。国民を守る気力のない安全保障に無責任な国の末路がどういうものか、そうした国民がどれだけ不幸か、こうした歴史がすでに証明しているのである…

こうして誕生した武士は、約400年という長い平安時代の中で、全国各地に台頭していく事になる。

だが、こうした動きを公家たちは面白く思っていなかった。公家たちは、自らを高貴とし、武士たちを野蛮な汚れた者たちと蔑視していた。それは死穢しえの思想に基づくものだった。死穢とは、人を殺したり、人の死骸を見たりすると、自らが穢けがれる、いわば呪われてしまうという考え方である。

公家たちにしてみれば、武士たちは、ただの殺人集団に過ぎなかった。人殺しを生業とする者たち、その程度の認識でしかなかった。当然、死穢にもまみれている。そうした者たちが武力を背景にして、自分たちの領地で実権を握り、公家たちの支配権を脅かしている。

しかしながら、権威と権力しか持たず、武力を持たない公家たちは、争い事が起きた時は、こうした武士たちに頼らざるを得ないのも事実だった。人殺しは野蛮なものだから自分たちはしたくない。しかし、争いが起きれば、誰かがやらなければならない。だから代わりに、嫌な事をそれを請け負う武士たちにやらせる。やらせる以上は、その支配権を認めなければならない。それがジレンマとなる…

現代社会でもよく見られる光景である。いわゆる偽善者が抱える不毛なジレンマと一緒だ。差別を差別と思わず、自分の過ちを認めず、現実を認めず、綺麗事ばかり並べて、その綺麗事にそぐわない現実に疑問を持ち、ジレンマに陥る… 実に不毛である。現実を認めず、に差別ばかりをして、不満を並べてジレンマを抱える公家と、差別を受けながらも耐え、現実の中で着実に生き続ける武士たち… 後世、公家の世が没落し、武家の世になったのもうなずける話である。

ただ、それだけ権力は公家たちは握って離さなかった。武士たちが、どんなに命がけで戦っても、公家たちより上になる事はなかった。地方で言えば、武士たちは守護として土地を支配する事は出来ても、

支配権の最高権力である国司職などは、京にいる公家たちが握っていたのである。国司とは、今で言えば都道府県知事と同じである。

そして、頼純の時代の頃、下野国にも新しい国司が京より下ってきた。

その名を中納言藤原行利ちゅうなごんふじわらのゆきとしと言った。

## 国司の横恋慕（よこれんぼ）

大治2年（1127年）、朝廷は、悪化する財政と滞る徴税対策として、新たな荘園整理令を発布した。いわゆる大治の荘園整理令である。これに伴い、全国各地の朝廷の支配権を改めて強化するため、関東にも新たな国司が下ってきた。

名を藤原行利という。年は二十代後半。官位は権中納言。後世、天下の副将軍として有名になった水戸黄門の官位が同じであったと言える。その位の高さが解るだろう。行利は、下野国だけでなく、上野国、常陸国（現在の茨城県）の3ヶ国の国司として、関東に下向してきた。

北関東各地の諸侯たちは、行利が来ると、早速国府に参内し、頼純の後見だった宗綱も行利が下野国府に来ると、下野守護として真っ先に参内した。

そして行利は、顔見世に参内する諸侯たちにこんな事を告げていた。行利「私には、これまで良縁もなく、今は妻もない。だが、そろそろ妻を迎えたいと思うが、誰か良きものはおらぬか？」

行利の言葉に、諸侯たちは、競って自分や一族の娘を行利に差し出した。もし、行利に見初められれば、中央の公家たちと血縁になれる。これほど強い後ろ盾はない。

だが、行利には、本気で妻を探す気はさらさらなかった。行利は、いつまでも関東にいるつもりはなく、役目を終えたらすぐに京に帰るつもりであった。妻も迎えるならば、京の同じ公家から迎えた方

が良い。出世もすれば、皇族の姫を迎える事も出来るかも知れない。それなのに、わざわざ関東の田舎の得たいも知れぬ娘などを妻に迎えたなら、むしろ自らの立身出世の妨げである。

ならば、なぜそんな事を言ったのかと言えば、単に自らの悦楽のためだけに過ぎなかった。関東には、優雅な京に比べ楽しみが少ないせいぜい酒と女くらいである。その女を集めるために言っただけ、言わば色欲を満たすためだけの事だった。

ただ、諸侯も、それが解らないほど馬鹿ではなかった。もちろん、妻になどと言っても、自らの家柄を考えれば、正妻になれるなどは思っていないかった。しかし、男と女は、所詮は情の世界。身分だ格式だと言っても、女が男を籠絡さむかくし、色情に溺れさせる事が出来れば、身分や格式に関係なく、正妻になれる可能性だつてある。正妻にならなくても、側室めかけでも妾的な存在でも出せれば、それでも血縁は血縁である。その立場は、いかようにも利用する事が出来る。後継となる子供でも生んでしまえば、こちらのものだ。

それもまた政略である。お互いにそれぞれの思惑を持ちながら、行利の下には女が集まっていた。

しかし、行利は不満であった。一時のさみしさを紛らわす女は集まるものの、自分を熱くさせるような女が1人も現れなかったからだ。そんな折だった。行利は、こんな話を耳にした。

「堀江殿の妻、弥生様は、まだ年も若く随一の美人と聞いております。」

興味を持った行利は、頼純に使者を送り、妻とともに参上するよう命じた。もつとも、これまで何度となく期待を裏切られてきたた

め、今回の事もあまり期待はしていなかった。

使者を受けた頼純は、早速、下野国府に参上すべく準備を始めた。いずれは顔見世の挨拶には行くこうと考えていた頼純だったが、今回の件については、少し解せない事があった。それは。妻も一緒にという命令だった。普通、政治的な謁見の場に妻を連れて行く事はない。もし、自らの城に国司様がくれば、それは供応役として妻の目通りをして相手をさせるということもあるが、国府という公式の場に連れてこいなどと言うのは、初めての事だった。

頼純「皆もそうしておるのだろうか？」

だが、難しく考えようとする頼純に弥生は言った。

弥生「良いではありませんか。私も国府は一度見ておきたいと思っております。私がついていだけでよければ、喜んでお供いたします。」

その言葉を聞いた頼純は、それ以上面倒な事は考えないようにした。だが、これが2人の運命を大きく変える出来事になるうとは、2人とも思いもよらなかった…

頼純は、数十人の家来と弥生を連れて下野国府に参内した。そして、妻とともに国司である行利に謁見したのである。行利は、この時初めて弥生を見た。

行利一（信じられぬ…何と愛らしい娘だ…）

行利は、弥生に一目惚れしてしまった。京にもこれほど愛らしい娘

はいなかった。行利は、2人の馴れ初めについて頼純や弥生に尋ねた。国司の問い掛けに、頼純や弥生は、恥ずかしながらも、16歳と13歳で結ばれた事や昨年第一子が誕生した事など、その馴れ初めを話した。

話を聞くほどに、行利は嫉妬していた。自分は二十代も後半で妻もなし。にもかかわらず、この頼純という若造は、自分より卑しい身分で、自分よりも10歳も若くして、このように美しい弥生を13歳で妻にして、思うようにしてきたのかと思うと、妬まずにはいられなかった。

しかも、馴れ初めの話をしている間、時折2人は見つめ合って、弥生は、頼純の顔をはにかんで見ていた。そのはにかんだ笑顔がまた愛らしく、それが行利の嫉妬心に火をつけた。

行利は、何としても弥生を手に入れたい… 謁見が終わって頼純たちが帰った後、そう強く思うようになっていた。そして、そのための策謀を頭の中に巡らせていたのである。

行利（聞けば、奴は源氏。しかも謀反人の子。あの辺には、宇都宮や那須もいるが、あれは同じ藤原。藤原でなければ何とでも出来る…）

その後、行利が国府に呼びつけたのは、弥生の父である原重房であった。



## 父の裏切り

頼純と弥生は、居城に帰る途中、宗綱の居城である宇都宮城に立ち寄り、その北に座する二荒山神社ふたあらかやまじんじやを参拝した。

二荒山神社は、宇都宮と日光に二つある事で知られているが、一般的には、両社は同じ系統のものと勘違いされ、どちらも「ふたらさんじんじや」と呼ばれがちだが、漢字表記では同じ名前の神社であっても、その名前の呼び方は、日光の二荒山神社を「ふたらさん」と呼ぶのに対して、宇都宮の二荒山神社は、正式には「ふたあらかやま」と呼び、二つの二荒山神社は全く異なる。系統も、遠い親戚みたいな歴史はあるのだが、原則的には別の神社であり、祭神（奉られている神様）が異なる。

歴史は、宇都宮の二荒山神社の方が古い。その主祭神は、第10代崇神天皇すじんの時代、東国平定のために関東に下ってきた崇神天皇の子である豊城入彦命とよきいりひこのみこととされている。その曾孫である奈良別王ならわけのみこが、第16代 仁徳天皇にんとくの時代に下野の国造くにのみや（現在で言う都道府県知事）に任命された時に、曾祖父である豊城入彦命を氏神として奉ったのが宇都宮の二荒山神社の始まりである。

東路あすまじの多くの夷えびす 平らげて

「背そむけば討つのみや」とこそ聞け

（宇都宮）

後世には、豊城入彦命を讃えるこんな歌も残されている。

豊城入彦命は、天皇の長男（第一皇子）でありながら、天皇にはなれずに東国に下ってきた。その親中派複雑であったろう。頼純は、

神社に参拝しながら、自分と少し似た境遇の豊城入彦に思いを馳せていた。

弥生「宇都宮大明神（豊城入彦命）様は、武の神様とか…」  
頼純「そうだ。下野武士すべての氏神だ。ぜひにもあやかりたいものだ…」

二礼二拍手一礼…

頼純（宇都宮大明神よ、我が野望遂げさせ給え…）

頼純は、そう強く祈っていた。

その一方で、同じ頃、行利からの呼び出しの使者はすぐに弥生の父重房の下に経<sup>た</sup>ち、驚いた重房は、すぐさま支度し、翌日には下野国府に参上した。突然の呼び出しに、重房は、何か不手際があったのではないかと戦々恐々としていた。すでに顔見世の謁見はとうに終えており、自分の身分を考えれば、国司に直接呼び出されることなどまずない。不手際があったとしか思えなかった。

その重房の予感、半分当たっていた。国府に到着した重房であったが、国府ではなく、行利の屋敷に行くよう命じられ、その屋敷の一室に通され、そこで行利と2人きりにされたのである。

重房（まさかもわしはここで斬られるのか…）

ところが、行利が口にしたのは、全く思いもよらぬ話であった。

行利「重房、お前には、良からぬ話をしなければならぬ。」

その瞬間、もしかしたらという重房の淡い期待は、一瞬にして打ち砕かれた。そして重房は、自らの死をも覚悟するほどに内心は取り乱していた。

重房「何か不祥事でもござりましたか…」

行利「いや、お前の事ではない。お前の娘婿の事じゃ。」

重房「娘婿と言いますと、堀江にござりますか？」

行利「左様じゃ。」

お前の事ではない…と聞いて、少し安堵感を持った重房は、次第に我を取り戻していった。

重房「堀江が何か？」

行利「どうやら、謀反を企んでいるらしい。」

重房「真にござりまするか？」

すると、話に食いついてきた重房を見て、行利は内心ニヤリとした。

行利「そうらしいのじゃ。奴は、源氏として、祖父義家を慕う関東の者どもを集めて兵を挙げ、この関東を支配しようとしているのじゃ。」

重房「まさか…」

行利「わしもまさかと思うたわ。あのような若造がそこまで大それた事をとな。じゃが、奴も今年で二十歳<sup>はたち</sup>。どうやら、それを待っていたらしい。すでに源氏に心寄せる者たちに、檄<sup>げき</sup>（手紙の事）を發したらしいとも聞く。」

重房「なんと…」

行利「奴は、まずはわしを討って北関東を制するつもりじゃ。じゃが、それだけの軍勢を集めるには、まだまだ時間がかかるはず。そ

の前にわしは頼純を討とうと思うが、もし、わしが直接出て行けば、その類は、堀江だけでなく、一族にも及ぶ。」

重房「…と申しますと…」

行利「そうなれば、お前も処分しなければならなくなる。」

重房「な、なんと!？」

ゆゆしき事態である。重房の動揺は、自分でも計り知れないほどに大きかった。まさに青天の霹靂である。だが、それを見て行利は、心の中でほくそ笑んでいた。

もちろん、これはすべて行利が作った嘘であった。だが、権威に弱い重房は、行利の話の信じてしまっていた。国司様が、このような嘘をつくはずがない、第一、こんな嘘をついたところで何の得もない、そう思ってしまったのである。

まさか、行利の狙いが弥生で、そのために頼純を廃そうとして嘘をついているなど、重房は夢にも思わなかったのである。

そして行利は、本題に入った。

行利「じゃから、お前を直々に呼び出したのじゃ。この件を内々に収めるためにの。」

重房「…と申しますと。」

行利「おぬしが、堀江を討て。」

重房「わ、わたしがですか？」

行利「そうじゃ、おぬしを助ける手立てはそれしかない。そうでなければ、わしは、お前を朝敵として、堀江とともに討たねばならぬ。内々に収めるには、それしかないのじゃ。」

重房「…」

行利「どうじゃ、出来るか？」

重房は、じつと目を伏せた。

重房（なぜ、このような事になってしまったのじゃ… 本当に頼純は謀反など… しかし、こうして国司様に目をつけられるということとは、頼純に落ち度があったということじゃ…）

そして、そうこう考えているうち、重房の中には、ふつつつと頼純に対する怒りが込み上げてきた。

重房（これぞと見込んで、わしは弥生を与えたというに… わしの期待を裏切りおって… 許せん！）

行利「どうじゃ、覚悟は決まったか？」

重房「はは、解りました。ただひとつだけお願いがござりまする。」

行利「なんじゃ？」

重房「わが娘、弥生の命は、助けていただきとうござりまする。」

その言質<sup>げんち</sup>が出た瞬間、行利は、しめた！と思った。

行利「もちろんじゃ。」

行利にしてみれば、それが最大の目的なのだから…

重房「ありがたき幸せ。では、これより国元に帰り、堀江を討つ支度を整えまする。」

行利「あいわかった。では、これよりわしとの連絡を密にして、事の次第を詳細に報告するよう。わしの命があるまでは動くでないぞ。」

重房「ははっ！！」

こうして、重房は、娘婿である頼純を討つ決意をしたのだった。

## 上洛の決意

居城の板鼻城に戻ってきた重房ではあったが、行利の話を聞いた時は、もはやこれまでとすら思ってたほどに頼純の謀反を確信していたが、冷静になってよくよく考えてみると、頼純が本当に反乱など考えているのか、解らなくなってしまうていた。

頼純の性格を考えても、謀反などとも考えられなかったが、何より、下野の現状を考えると、むしろ源氏である頼純が兵を起こすなど容易なことではなかった。

平安の世は藤原氏全盛の時代である。皇族を除けば、権力的にも権威的にも最高の氏族だ。頼純の領地の北に構える那須も、南にある宇都宮も藤原氏である。宇都宮氏は、頼純の祖父に領地を与えられて下野に根を下ろしているが、元々の主従関係は逆だったのである。

頼純の祖父義家の祖父、つまり曾々祖父に当たる河内源氏の祖である源頼信は、義家に従っていた宇都宮氏の初代宗円の曾祖父（ふじむら）藤原道兼（のみちかね）の家来だったのだ。この道兼は、「この世をば わが世とぞ思う望月の欠けたることも無しと思えば」と歌った事で有名な藤原道長の兄であり、関白まで上り詰めた人物である。頼信はその後、道長にも仕え、道長の下では道長四天王の一人としても数えられ、関東武士を最初に従え、その勢力基盤を築いている。

そうした歴史を背景に格式をみれば、頼純の源氏よりは、宇都宮の藤原の方が上である。頼純の源氏が関東に勢力があるのも、全ては藤原氏のおかげである。宗円の祖父である兼隆（かねたか）は、行利と同じ中納言であったし、父の兼房（かねふさ）の官位は正四位であったが、これは、奥州を支配している藤原氏や鎮守府將軍の官位よりも上である。

これは、当時誰もが知っていた事実であり、そのために宇都宮の家臣の中には、主君である宗綱が、元主君の子孫として頼純を保護していることを疎ましく思っている者もいた。もし、そんな状況で反乱など起こしても、宇都宮がこれに追隨する保証がないどころか、逆に宇都宮に堀江が滅ぼされる事も考えられる。那須も塩谷の地への勢力拡大を狙っており、堀江は滅ぼされ、塩谷郡は、宇都宮と那須の草刈り場になるだろう。

頼純は、まだ若すぎるし、これを覆すほどのカリスマもなければ、駆け引き力も持ってはいないだろう。それは頼純もよく解っているはずだ。

こうして見ると、謀反など考えられないと思うのは当然の事だった。

重房は、頼純謀反の話を通つ先に妻に相談した。そして妻も謀反など考えられないと言った。そんなこと信じたくないという思いからの根拠のないそれだったが、ただ、話があまりにも突拍子もなかった。

妻「ならば、頼純殿に直接問いただしてはいかがですか？」

重房「そんなこと出来ようはずがない。」

妻「なぜです？」

重房「わしは、頼純を討てと命じられてきたのだ。説得しろと言われてきたわけではない。もし、頼純に会いに行った事が知られれば、わしが討伐を受けてしまう。それに謀反が本当だったとしたら、頼純にわしはその場で殺されてしまうかも知れん。」

疑心暗鬼に陥った人間とは、かくも愚かである。身内さえ信じられなくなるのだ。けれども、大なり小なり、これは誰にもある事だと

思えば、人が愚かだとしか言い様がない…

とにかく重房は、頼純を討つと約束してきた以上、頼純の謀反が嘘だという確定的な証拠がなければ、頼純を討たなければならぬ。重房は、その準備を密かに進めつつ、頼純周辺に間者（今でいうスパイ）を走らせ、その身辺を探らせた。

すると、思いもよらぬ報が重房の耳に飛び込んできた。

重房「なんと！ 頼純が上洛すると！？」

放っていた間者からの報告では、年が明けたら頼純が兵を率いて上洛し、朝廷に挨拶するという。重房は、これに激怒した。重房に対して、何の相談もなかったからである。

重房（やはり、謀反はまことだったか。わしに相談しないのは、相談できない理由があるからじゃ。おそらく朝廷に官位を求め、国司様に対抗しようとしているに違いない。許せん！！）

重房は、この時、頼純を討つ決意を固めたのだった。

他方、頼純は、確かに上洛の準備を進めていた。しかし、これは宗綱の勧めによるものだった。父義親が謀反人として討たれて20年が過ぎようとしており、上洛して朝廷に忠勤を誓い、その汚名を晴らしてくるよう言われたので、それに応えたものだった。

もともと頼純には、今回の上洛に秘める野望もあった。今、頼純は無位無官であったが、上洛して朝廷の覚えを高くし、得られれば官位をいただき、将来的な奥州征伐の足掛かりとしたかったのである。

しかし、重房が確信するような国司への謀反など、微塵の思いもなかった。

頼純「弥生、ともに京に行こう。都を一緒に見てくるのじゃ。」  
弥生「はい。」

2人にしてみれば、それは初めての遠出の旅だった。婚姻して以来、2人で行ったことがあるのは、下野の国内か、上野と下野の国境を行ったり来たりしたくらいである。数日もかけるような長旅は初めてだ。

だが、運命の歯車は、この時、確実に狂い始めていたのだった。この難しくもない決断が、まさか自らを窮地に追い込むことになろうとは、頼純は気付かなかったのである。

## 頼純出陣

年が明けて年は大治3年（1128年）となった。

正月、頼純は弥生を連れて、重房の居城である板鼻城を訪れていた。年賀のあいさつである。重房は、内に秘めたる怒りを押し殺して、舅としての顔を装って2人に会った。

重房「よう来た婿殿。」

頼純「舅殿もますますご健勝な様子。何よりでござりまする。」

頼純は知らなかったが、重房にとっては、頼純の言動の全てが白々しく見えた。

重房（この謀反人めが… かえるの子はかえるかの。）

重房は、頼純に酒をふるまい、その夜を飲み明かし、翌日頼純は弥生とともに帰って行った。しかし、重房にしてみれば、これは末期の水ともいふべき最期の酒宴であった。

年賀の行事を終えたら上洛するべく準備を整えていた頼純だったが、その頼純に朝廷から思いもよらぬ使者があつた。それは、武者所に任命するという使者であつた。武者所とは、天皇を生前退位した太上天皇（上皇・院）の御所を護衛する武士の待機所の事を言い、そこに務める武士もまた、通称として武者所と呼ばれた。例えば、上野国の者がこれを務めれば上野武者所、常陸国の者がこれを務めれば常陸武者所と呼ばれるが、頼純は、下野武者所として任命されたのだった。

時はさかのぼって応徳3年（1086年）11月、時の白河天皇は、自分の弟たちを皇位につけようとする勢力に反発して、まだ8歳であった我が子を皇太子にし、皇太子したその日に即位させるという前代未聞の強硬を行った。皇位の流れを確定させるとともに、自らは、上皇となり史上初の院政を敷き、その実権を掌握した。

その白河上皇の院政は、白河上皇が法皇と変わりつつ、頼純の時代にいたるまでまだ続いていた。その院の警護を命じられたのである。だが、これは頼純にとっては好機であった。当初は、一方的という側面が強い、行き当たりばったりと言われても仕方のない上洛であったが、これにより堂々と上洛する事が出来る。しかも、天皇の権力を超えた当時の朝廷の最高実力者である白河法皇に近づけるのだ。これにより、すぐさまの上洛は延期となり、上洛を年末まで待つこととなった。

その一方で、頼純にはもうひとつ、嬉しい知らせが入った。奥州藤原氏の当主藤原清衡が病に倒れたという。清衡は、祖父の義家から奥州を奪った力タキである。出来れば自分で討ちたいものだが、まだ実力的にはとうてい無理。不幸を喜ぶくらいの事しか出来なかったが、頼純は、全ての運が自分に向いてきたかのような気さえしていた。

そして、その年の7月13日、清衡は、当時としては長寿の73歳で没した。これは、後世、残された清衡のミイラを検査して判明した事だが、脳溢血や脳腫瘍などにより、すでに亡くなる10年ほど前から半身不随の状態だったらしい。その後、藤原氏は後継者争いの内紛へと発展していく。

頼純は、この内紛により、藤原氏は衰退していくであろうと見てい

た。そして、上洛して役目を終えて帰ってくる頃には、自分が奥州へ攻め込む好機も生まれているだろうとにらんでいた。これから上洛してやる事は、そのための布石。何としても、朝廷の信任を得て、奥州討伐の名目と力を手に入れる必要があった。

それから頼純は、上洛を稲刈りが終わる10月に定めた。10月1日に堀江山城を出立して、宇都宮に立ち寄り、下野国府に立ち寄って、その後、東海道を抜けて上洛する予定だった。

頼純が10月に上洛を決めたという報は、すぐさま重房に届けられ、重房は、これを行利に報告した。重房は、行利の協力を得て、その時には約300騎の軍勢を投入出来る体制を整えていた。頼純の上洛の兵力は、警護だけなのでわずかに30騎。残りは、頼純や弥生の側で世話をする女中などの従者である。あとは、討ち漏らさぬように策を巡らすだけだった。

頼純は、自分が留守の間の領地の守りを堀江十勇士の家臣たちに任せる一方、上洛の共を兼光に命じた。これを兼光も喜んだ。

兼光「喜んでお供つかまつりまする。」

頼純「京で共に夢の続きを見ようぞ。」

兼光「はっ。」

そして、10月1日、頼純は、弥生と月若丸、従者に兼光を従え、50人の手勢や従者とともに上洛の途についたのだった。

この動きに対して、板鼻城の原の軍勢300騎も頼純の一向を追うように出立した。その総大将は嫡男の原太郎。さらに、重房の次男から四男の3人も太郎に従い出陣していた。頼純の上洛路を予め調べていた原軍は、先回りして南下し、相模国（さがみのくに）（現在の神奈川県）に

入っていた。

迎え撃つ場所は、すでに決めていた。それは、相模国と武蔵国むさしのくに（現在の東京、埼玉、神奈川県の一部）の国境にある上田山うえだやまという場所だった。

## 上田山

東北地方の事を昔、陸奥むつ・みちのくと言った。この陸とは、常陸国の事である。現在の東海道は、静岡、愛知、三重に留まる地域に限定されるが、畿内（昔の首都圏。現在の京都、大阪、奈良）を中心として確立された元々の東海道には、現在で言えば、山梨、神奈川、東京、埼玉、千葉、茨城も含まれる。そして、東海道の最終地点、つまり最も東端に位置するのが茨城、かつての常陸国であった。さらに、その奥の国だから陸奥。そう呼ばれたのである。「みちのく」は、「みちのおく」が略された呼び名だが、その「みち」こそ東海道の事である。

下野は、東山道の終わりの国。そこから京に向かうには、東山道を西に向かうか、南に下って、東海道を西に向かうかのいずれか。東山道は、あまり開けた道とは言い難く山道ばかりの道である。だから、どちらが行きやすいかと言えば、東海道の方が、海に面していて進みやすい。

だから頼純は、東海道を選んだ。それが一般的な上洛ルートだ。しかし、東海道を選んだ理由は、それだけではなかった。

頼純は、海を見たかったのだ。未だ見た事のない海を弥生と…

もしかすると、頼純は、海を見たことがあるかも知れない。生まれは摂津国だ。瀬戸内海だが、海に面している。摂津から下野に来る間に海を見ているかも知れない。けれどもいずれも記憶にない。赤子か物心つく前の話だ。例え見ても覚えてない。

そういう意味では初めての海だ。もちろん、弥生も見た事はない。

頼純「ぜひとも海が見たいものだ。」

弥生「はい、わたくしもです。」

頼純の一行は、1日のうちに宇都宮につき、宇都宮城で一泊した。翌日、下野国府に向かうも、行利は不在。上野国府におり会えなかった。ただ、そこで必要な手続きを済ませ、いよいよ東海道へ入った。下野の東海道は、国府から始まっている。

頼純「いよいよ東海道じゃ。」

頼純は、馬を下りて歩いていった。その両側には弥生と兼光がいた。

兼光「下野の国境を超えて上野、武蔵国と入りましたな。私は、武蔵は初めてです。」

頼純「わしも赤子の頃に通って以来、初めてじゃ。弥生もそうであらう。」

弥生「はい。」

頼純一行の度の雰囲気は、実に和やかであり、旅を楽しむ余裕さえあった。

全てが初めての景色だった。山があつて田が広がっていて、森があつて林があつて、村があつて民家や寺社が転々としていて… 頼純の領地でも見られるような、どこにもある風景だ。それなのに、土地が変わると、まるで異世界に入ってきたかのような違和感と新しさを感じる。土地が違うから、似たような風景であつても同じではないから… 確かにそうなのだが、この感覚は、そうしたものではなく、一言で言えば風土という言葉に象徴される空気感とか雰囲気によつて得られるものなのだろう。

10月3日、原太郎率いる300騎の軍勢は、すでに上田山に到着していた。上田山は、小高い丘のような小さな山で、武蔵と相模の国境を越えるときに通る通過点だった。原太郎は、兄弟たちに兵を分け、要所要所に兵を伏せてここに待機した。間者の報告では、10月5日頃、頼純一行は、ここを通過する予定だった。ただ、予定は予定ではない。予定はずれて、1日遅くなる事もあれば、早くなる事もある。国司の命令だけに失敗は許されない。だからこそ、念には念を入れての早めの出陣であった。

太郎「良いか。頼純は武芸の達人じゃ。連れてる家来も精鋭。気を緩めるでないぞ。」  
家来「おおっ！！」

そして10月4日、武蔵と相模の国境の手前の宿場町で、頼純一行は一夜を明かす事にした。その夜は、澄み切った夜空にまぶしい月が浮かぶ、明るい夜だった。頼純は、月若が寝た後で、弥生を連れ出して、ともに夜空を眺めていた。

頼純「塩谷でも、同じ空が見られてるかの。」

弥生「北の空もよく見えます。おそらく…」

頼純「さようか…」

少しだけ黙り込んだ後、頼純は月を見上げながら口を開いた。

頼純「わしは、いずれこの武蔵の地も我が領地とするつもりじゃ。」

弥生「武蔵をですか？」

頼純「武蔵だけではない。この吾妻あじま（関東の事）の地の全ては、祖

父八幡太郎様（義家）の領地じゃ。そして奥州も制して、祖父の念願を叶えるのが… いや、われら源氏の念願を叶えるのがわしの夢じゃ。」

弥生「…初めて聞きました。とのの夢…」

頼純「この度の上洛、その布石と思っている。そうしなければならぬ。」

弥生「…」

頼純「再び、この地に帰った来たら、わしは動くつもりぞ。」

弥生は、そんな頼純の横顔を頼もしく見ていた。そんな弥生の視線に気づいてか否か、頼純は弥生に振り向いて、2人は見つめ合った。

頼純「弥生、これまでありがとう。」

弥生「突然どうされたのですか？」

頼純「いや… 言える時に言っておこうと思ってな。それに、これからわしを支えて欲しい。そう言いたくて、まずはこれまでの礼を言ったのじゃ。」

それを聞いた弥生はクスクスと笑った。

頼純「なんじゃ… 何がおかしい？」

弥生「とのらしいと思ひまして。」

頼純「どう、わしらしいのじゃ？」

弥生「とても不器用で。」

頼純「なに？」

すると、それを聞いた頼純は、思わず吹き出して笑ってしまった。

頼純「そうか、不器用がわしらしいか。確かにそうだな。」

弥生「はい。でも、そんなのが私は…」

頼純「わしもだ。不器用だからこそ、弥生が必要だ。」

そして弥生は頼純に寄り添い、頼純は、そんな弥生の肩を抱きしめた。

2人は西の空を見つめていた。

頼純「まずは、あの空の下じゃ。そこから新しき世が始まる。」

しかし、この時、目の前に裏切りと言う名の運命が待ち構えていようとは、21歳の頼純にも、18歳の弥生にも、思いも寄らなかつた…

10月5日早朝、昨晚より変わることなく空は澄み切ったように晴れ渡っていた。頼純一行は、早々と出立し、間もなく相模との国境である上田山に差し掛かるうとしていた。

この動きはすでに原方に察知され、逐一行動が報告されていた。原勢は臨戦態勢を整え、頼純一行を待ち構えていたのである。

太郎「良いか、弥生と月若、女中たちには手を出すでない。討つのは頼純だけで良い。弥生と月若は、捕まえ次第、そのまま板鼻の城へ連れて走るのだ！！決して頼純を討つ姿を見せてはならぬ。」

太郎は、兄として弥生を助けるつもりだった。月若も殺せない。殺せば、弥生は自害してしまうだろう。月若が生きていれば、頼純を殺しても、子供を残しては死ねないはずだ。太郎はそう思っていた。

そして、ついに頼純一行が上田山に差し掛かった。すると、原の手勢が一斉に頼純の一行を取り囲んだ。突然の事に、頼純や一行は驚

き、連れていた馬がいなないた。

頼純「こ、これは何事じゃ!?!」

見渡せば、見覚えのある顔がちらほらと見えた。その中に太郎もいた。

頼純「た、太郎殿!?!」

弥生「兄上…!」

驚く2人の前に太郎が出た。

頼純「これはいかなる事か!?!」

太郎「何を白々しい! この謀反人めが!?!」

頼純「な、何の事じゃ?」

太郎「国司様に謀反を企んだ罪で、これよりお前を討つ!?!」

頼純「謀反? わしが? 何を馬鹿な…!」

太郎「ええいつ、問答無用!?! かかれ!?!?!」

すると、一斉に抜刀した原の手勢が四方から頼純一行に襲い掛かった。

頼純「やむをえん!」

頼純は、自らも抜刀すると、弥生と月若、その周りにいた女中たちを逃がそうとした。

頼純「弥生、逃げよ!」

弥生「との!?!」

弥生は留まろうとしたが、弥生を突き放すと、女中たちに命じた。

頼純「弥生と月若を頼む!!」

女中「はい!!」

弥生「との!!との!!!!!!」

この時、月若を抱いて弥生の手を引いて逃げたのは、更科たけしなという月若の乳母だった。しかし、多勢に無勢。弥生たちは、上田山を下りきったところで原の追っ手に捕まった。そして、抵抗する者は縄で縛りあげられ、弥生と月若、更科の3人と女中たちは、そのまま原の本城の板鼻に向かって走り去った。

頼純は、弥生を逃がしはしたものの、逃げ切れない事は解っていたが、この場になければ、間違つて斬られる事はないだろうし、原も弥生までは討たないだろうと思っていた。

頼純（弥生、月若…さらばじゃ!!）

頼純は、自らの死を覚悟した。いくら自分が奮戦したところで、この多勢に無勢で周りを囲まれてはどうしようもなかった。だが、このまま犬死するわけにはいかない。濡れ衣をかけて殺そうとする卑怯な原兄弟を討たねば、死んでも死にきれなかった。

頼純「おのれ原め!! 何を血迷うたか!？」

太郎「何を言う! 国司様に謀反を企んだのはお前だろうが!？」

頼純「わしは知らぬ!!」

太郎「往生際の悪い奴じゃ!!」

その時だった。頼純に向かって、原兄弟の末弟の四郎が襲い掛かった。

四郎「覚悟!!」

しかし頼純は、たじろぐ様子も見せず、あっさりと一太刀で四郎を切り捨てた。

頼純「お前ごときにわしが斬れるか!!」

太郎「四郎!!!!!!」

四郎は即死であった。これを見た堀江勢の意気は上がった。

堀江勢は強かった。若い兼光を中心に、数だけに頼る原勢を見事に退けていた。この勇猛果敢な堀江勢を前に、後ろの方にいた原の手勢はたじろいだ。

しかし、斬っても斬っても新手が出てくる原勢に対して、堀江勢は30騎ばかり。徐々に堀江勢も1人2人と討ち取られていった。

そんな中、原兄弟の三男の三郎が兼光に襲い掛かっていた。兼光は、すでに原の手勢を10人ほど切り捨てており、刀の切れ味も血潮で鈍って、さすがに息も上がっていた。だが、敵の大將の1人である三郎だけは打ち取らねばと奮戦していた。

兼光「うおおお!!」

だが、その時だった。

グサッ!!!

兼光の右脇腹に、今までに感じた事ない違和感と激痛が走った。

三郎の家来の1人が、兼光の脇腹を小太刀で貫いたのである。兼光は、たちまち自分を刺したものを切り捨てた。

兼光（と、との…）

その瞬間、故郷の塩谷の地の景色と、そこを頼純と駆けた思い出が、走馬灯のように兼光の脳裏を走り抜けた。

兼光（との… 楽しかったでござる…）

脇腹を刺されてよろめいた兼光に、三郎が襲い掛かった。

三郎「覚悟！！！」

次の瞬間！！ 兼光の太刀が真一文字に三郎の首をはね、三郎の首が宙に浮いていた。これを見た三郎の家来たちが、四方から一斉に三郎の体に刀を突き刺した。

兼光（さらば！！）

すると兼光は、自分の刀を首筋に当て、ぐっと力を入れて斬りさき自害した。享年18。堀江十勇士の1人、関谷太郎兼光の壮絶な討死であった。

その光景を頼純は見た。

頼純「兼光！！！！！」

次々と自分の仲間が倒れていく。幼い時から剣術の稽古をして、夢を語り合った仲間たちが、卑怯な原の手勢に討たれていく… 頼純

の夢と希望が打ち砕かれていく…

頼純の胸は、悔しさと怨念に満ち溢れた。

頼純「ちくしょう!!! ちくしょうめ!!!!!!!」

頼純は、ぐっと刀を握りしめ、そのまま原兄弟の次郎に斬りかかっていた。次郎は、その気迫にたじろぎ、一瞬構えるのが遅れた。その隙を頼純の太刀は逃さなかった。

次郎「ぐわっ!!!!」

次郎もまた、頼純の一太刀で絶命した。  
残るは太郎のみ。

太郎「おのれおのれ! 我が兄弟たちを…」

頼純の手勢も頼純と数名の家来を残して、みな原の手勢に討ち取られていた。そして原の家来たちが、太郎を守るように頼純を取り囲んだ。

しかし頼純は、取り囲んだ雑兵など見てはいなかった。見ているのはただ1人。卑怯者の大将原太郎だけ。頼純は、ぐっと歯を噛みしめ、囲む兵たちに構わず太郎に向かって突撃した。太郎を守る兵たちが、頼純に向かって刃を突き立てた。その刃が頼純の体を無残に貫いた。

だが… 頼純は止まらなかった。鬼気迫る勢いに兵たちはたじろぎ、頼純は、真っ直ぐ太郎に向かって刀を振り上げた。そして…

刀を振り下ろした。

太郎「ぎゃあああああ!!!!!!」

その瞬間、原兄弟は全て討たれ、頼純は、全ての無念から解放されたかのようにすうつと体が軽くなっていくのを感じた。そして鼻には、潮風の匂いがしたような気がした…

頼純（弥生… 月若… 海はもうすぐぞ…）

頼純に一齐に太刀が浴びせられた。もう、頼純には、抵抗する力は残っていなかった。頼純は、そのままひざまずき、うつぶせに倒れた。

さっきまで青かったはずの空はにわか曇り、空には稲妻が走り、頼純の背中に雨が降ってきた。

上田山の戦いは、原兄弟全員と頼純が討死するという壮絶かつ凄惨な形で幕を閉じた。

享年21、堀江氏初代、堀江頼純の最期であった…

## ならひなりせば死出の山

頼純は、上田山にて討死。頼純の手勢は、ことごとく討ち取られ、あるいは自害し、そのあまたの亡骸は、近くに回向塚えこうづかを築いて葬られた。原の四兄弟の亡骸だけは葬られず、頼純の首とともに板鼻城に運ばれた。重房は、頼純の討死の報に安堵する間もなく、呆然としていた。まさか、自分の子供の全て討ち取られるなど、夢にも思わなかった。

4人の息子たちの亡骸を前に、重房は膝から崩れ落ちた。

重房「なぜだ…なぜこうなった…」

重房の横では、4人の息子の母が人目もはばからず取り乱し、大声で泣き伏していた。重房は後悔の念でさいなまれた。謀反が本当だったのか。本当ならば、これを討つのは正義。神仏の加護もあるはずだ。なのに、天罰かのごとく子の全てを失った。全てが信じられなかった。

重房（婿を討とうなどとしたワシが間違っていたという事か！！）

そうとしか考えられない現実が、重房の目の前にはあった。

一方、同じ板鼻城の別室には、弥生と月若が、更科とともに閉じ込められていた。まだ三つの月若は、疲れて、母の弥生の膝枕ですやすやと眠ってしまった。そんな弥生に、頼純の討死が伝えられたのは、原の手勢が戻ってから間もなくであった。

だが、幼子を抱いた母は取り乱すこともなく気丈であった。ただ、

静かに天を仰ぎ、静かに目を閉じて何かをおもむろに堪えた。頼純が原の手勢に襲われ、頼純に逃がされた時、弥生は全てを覚悟していた。

それから頼純の死とともに、原の四兄弟の討死も弥生に伝えられた。原の四兄弟は、弥生にとつても幼い時間を共に過ごした実の兄や弟である。特に四郎などは、赤子の時から知っている可愛がっていた弟だ。けれども、それを聞いた弥生は、嬉しかった。兄弟が憎かったからと言うよりは、頼純の武勇が嬉しかった。

弥生「さすがはとの。」

そして、弥生は言った。

弥生「我が夫の首を見せてください。」

それを伝え聞いた重房は、それを許した。重房にしてみれば、それは罪滅ぼしの意味もあつた。弥生の部屋に、頼純の首桶が届けられ、届けた家来が部屋を出て3人だけになると、更科が、その首桶を開けた。

更科「ああ、おいたわしや…」

そこには、確かに頼純の首があつた。別人と思いたくても間違えようのない夫の首がそこにはあつた。

泣き伏せる更科に月若を託すと、弥生は、そつと頼純の首を取り、しばらく見つめた後、静かにその首を胸の中に抱きしめた。その瞬間、弥生が堪えていたすべてのものが、弥生の目頭からあふれた。

弥生「との…さぞやご無念だったでしょう…」

それから弥生は、頼純の首を綺麗に洗い、髪を整えなおして死化粧を施した。

弥生「月若、父上は立派な武将だったのですよ。あなたも、父上のような勇敢な武将になるのですよ…」

月若は、穏やかな顔をして眠っていた。その月若を抱く更科に弥生は言った。

弥生「頼みがあります…」

更科「…」

その夜、更科は密かに板鼻城を離れた。幼い月若を抱き、頼純の首を持って…

弥生は、更科に全てを託した。頼純の首を塩谷の地に持ち帰り、菩提寺である六房寺に葬って欲しい事。月若を連れて隠し、育てて欲しい事。それが、弥生にとつての心残りだった。更科は、その弥生の意をくみ、今生いまこゝろの別れと悟りつつ、全てを受け入れ、後ろ髪ひかれる思いで旅立った。

更科（御前様…必ずや月若様をお守りいたします。どうか…どうか、安らかに…）

更科と月若が去った部屋に、弥生は1人残された。いや、1人ではなかった。弥生には見えていた。灯りもない、月明かりすらも届かない真つ暗で静かな部屋の中に、頼純の面影がある事を。弥生の目の前に、確かに頼純は座っていた。そこに、ぬくもりはあった。

そして頼純は、弥生に一首、歌を詠んだ。

連れて行く ならひなりせば死出の山  
闇路やみじを迷う事はあらしな

愛し合つて結ばれた夫婦めおとだからこそ、生き死にを共にしたい。私はお前とともに行きたい。お前とともにゆければ、もはや思い残すことはない。

弥生は応えた。

連れて行く ならひなくとも死出の山  
暗き闇路を共に迷わん

夫婦ならば、夫を追つて死ぬのが、この世のならい。けれども、そのようなならないなど関係ありません。私もずっと、あなたの傍そばにいたい。私も、ともにゆきたい。あなたとともに永遠に…

そして弥生は、短刀を自らの胸に突き立てた。

弥生「との、今、参りまする…」

弥生は、その刃を自らの胸に突き刺した。

後世に2人の悲劇を伝える古典「堀江物語絵巻」はこう記す。

その歳つもりて十八歳と申すに、  
あしたの露と消えたまふ…

享年18。若く美しい命の最期であった。

頼純討死の報は、行利にも即日すぐに使者が走り伝えられた。行利は、死者を前に喜びを隠さず、明日にも板鼻に向かうと使者に告げた。これで弥生が自分のものになる。行利の満面の笑みの理由は、それだけであった。

だが翌日、板鼻城で行利が見たのは、弥生の変わり果てた姿であった。

## 堀江の決意

行利は、弥生の亡骸なきがらを見て愕然とした。こんなはずでは… 行利もまた同じであった。

行利（なぜじゃ！ なぜ弥生が死んでおるのだ！？）

だが、それを言葉に出来ようはずはなかった。重房は、謀反人である頼純を討つために戦い、四兄弟と弥生の5人の子を失っていた。全ては、国司の命令に従って行った結果である。しかし、実は頼純は謀反人などではなく、全ては自分が弥生を得たいがために行わせた事… そんな事言えようはずがなかった。

しかし…

行利（この役立たずめが！！）

弥生を得られるものとはかり思っていた行利は、その期待を裏切られ、この程度の役目も果たせなかった重房に怒りすら覚えていた。自分に対する罪悪感など微塵もなかった。

だが、表向きな大義名分である謀反人を討つという役目は果たしたのだから、行利は、重房に何らかの処遇をしなければならぬ。苦々しく思いながらも行利は、頼純の謀反に関して原家はおとがめなしとする一方、その武功をたたえ、頼純が支配していた領地を重房に与える事を約束した。

行利（もはや、屍しかはねに興味はない。）

事の次第を見届けると、行利は、死んでしまった弥生にも目もくれず、さつさと自らの館に帰って行ってしまった。

その後、重房は、四兄弟の亡骸を自らの菩提寺に葬ったが、弥生の亡骸は堀江家の菩提寺である六房寺に運ばせた。重房は、もはや頼純を討った事を悔やんでいた。だが、後悔しても、弥生は帰っていない。せめて、弥生を堀江家の菩提寺である葬り、頼純の傍に置こうとした。そのくらいの事しか、重房には出来なかった。

しかし、堀江山城では、重房に対する怨嗟えんさの聲が高まっていた。頼純討死の知らせが届くと、家臣たちが一斉に堀江山城に集まっていた。

「なぜ、とのが討たれねばならぬのじゃ!!」

「義父でありながら裏切るとは許せん!! 原を討つべし!!」

だが、この中で冷静な者が1人だけいた。長井次郎安藤太である。安藤太は、まだ30代と若かったが、沈着冷静で物事を正確に分析して動く、老練な印象さえある知勇の十勇士の1人だった

安藤太は、頼純討死の一報が届くと、すぐさま間者を各地に放ち、情報収集を急いでいた。本当に主君である頼純は討たれたのか。どうい経緯で討たれたのか。一緒にいた弥生や月若丸、その他の者たちはどうしたのか。それらが把握出来なければ動けなかった。やみくもに動いても意味がない。

間もなく、頼純が国司に対する謀反の罪で討ち取られ、堀江の領地は没収され、原重房の支配となる事が判明した。これを聞いた家臣たちは激怒し、国司や重房を相手に一戦交えようという機運が高ま

つたが、安藤太がこれを制した。

安藤太「駄目だ！！ とのは謀反人ではない！！ にもかかわらず、我らが国司を討とうとすれば、本当に謀反人にされてしまうではないか。」

それに、まだ安否の解らない月若丸がいる。月若が再び塩谷に復帰するためには、これ以上事を荒立ててはならない。

安藤太は、国司に抗議するのではなく、重房と交渉する道を考えていた。国司と交渉しても、これ以上どうにもならないだろうし、下手すれば、討伐を受けかねない。しかし重房ならば、この度の戦で4人も子供を失うほどの痛手をこうむっている。塩谷を武力で抑え付ける力などない。ならば、いつでも月若が塩谷の地に復帰できるように、出来るだけ頼純が支配したままのこの現状を維持できるように努める事が良策と考えていたのである。

そんな安藤太の館に更科がやってきたのは、安藤太が重房に使者を送った翌日の事だった。

安藤太「月若様… よくぞご無事で…」

月若は、安藤太の前で無邪気に笑って見せた。3歳と言っても、この当時は数え年。今でいえば2歳の月若は、まだ父や母の死も何も理解していなかった。

そして安藤太は、頼純の首と対面した。

安藤太「との… さぞやご無念だったでしょう…」

安藤太に怒りの念がなかったわけではない。国司と重房を討ち、堀江の無念を晴らしたい。その気持ちは誰にも負けず強かった。それは、変わり果てた頼純の首を見て、一層強まった。だが、今立ち向かって、それは無理である。やるからには、本当に討てなければ意味がない。感情に任せて犬死しても、それは無念を晴らすどころか、無念の上塗りである。

今は、耐えるしかなかった。

更科は、事の次第を全て安藤太に話した。それを聞いた安藤太は、家来に命じて月若と更科、そして頼純の首を堀江家の菩提寺である六房寺に運ばせた。

そして、ある決意を秘めて堀江山城に向かると、弥生の亡骸が届けられていた。更科から話は聞いていたので、弥生の死は覚悟していたが、やはり変わり果てた姿には安藤太も動揺を隠せなかった。それでも悲嘆に暮れている暇はない。安藤太は急いでやらなければならぬ事があった。

安藤太は、堀江の十勇士たちに使者を送り、すぐに六房寺に集まるように命じた。その求めに応じ、討死した兼光を除く十勇士たちが六房寺に集結した。

十勇士たちは、頼純の首と弥生の亡骸を前に泣き伏した。そして、すぐさま弔いが行われ、頼純と弥生は、同じ場所に並べて葬られた。その後、月若を中心に十勇士たちは本堂に集まった。国司と重房を討つべしという声もある中で、安藤太は、みなに現状を説明したのち、自らの思いを語った。

安藤太「みなのお気持ちはよく解る。だが、今は耐える時ぞ。月若様

が元服するのを待つのだ。原には、塩谷を統治するだけの力はない。我々が原に従う振りをすれば、必ずや我らの所領は安堵されるし、そのための手も打ってある。我らは、月若様が元服するまでの間に力を蓄えるのだ。月若様は、その間、更科殿にかくまってもらう。更科殿は、奥州の岩瀬の出身。岩瀬の郡司、岩瀬権太夫の一族と聞く。そこで元服までの間かくまっていただけ、機を見て我らは立つ。

下野の情勢を把握していた安藤太には確信があった。安藤太は、重房にだけでなく宗綱にも使者を送っていた。宗綱にとって塩谷郡は、重要な北の守りの土地。ここが、宇都宮に親しい堀江の家臣団で安堵される事は、宇都宮にとっても利益となる。安藤太は、単純に重房を説得するだけでなく、宗綱にも手を回して、重房を説き伏せようとしていた。

安藤太の説得に、十勇士たちもやがて理解を示した。そして、その考えに従う事にしたのである。

安藤太のもくろみ通り、塩谷郡を与えられたとはいえ、息子4人を奪われ、力を失っていた重房には、塩谷郡を統治する力などなく、また、頼純や弥生に対する罪悪感にさいなまれていた重房は、宗綱の説得もあって、毎年、一定の年貢を納める代わりに、堀江の家臣たちの塩谷郡の委任統治を認めたのである。

そして月若丸は、奥州岩瀬の地へと更科とともに旅立った。月若丸の消息については、堀江の家臣たちは知らぬ存ぜぬを貫き、板鼻城を更科とともに抜け出て以後、行方不明となった。世間的には、そういう事にしておいたのである。いらぬ追っ手を避けるために…

堀江家の再興は、この時から始まったのである。



## 遺言

まだ物心もついていなかった月若丸は、更科に抱かれて奥州岩瀬の地にたどりついた。岩瀬は、現在の福島県の南部の郡で下野国とも近い。ただ、奥州の地なので、下野の諸将も行利も手が出せない場所だった。もつとも、月若丸が無事に落ち延びていたことは、堀江の家臣以外は知らぬ事だった。

岩瀬の郡司岩瀬権太夫の治政は安定しており、国は豊かだった。ただ、権太夫には子がなかった。更科が月若丸を連れて岩瀬に戻り、権太夫に目通りさせて事情を説明すると、権太夫は、月若丸を自らの養子にし、岩瀬一族の子として育てられる事になったのである。

そして更科は、引き続き、月若の世話人として傍につけられる事になった。月若は、更科の下で、強くたくましい武将へと育っていた。ただ、更科は、実の父と母の事は、月若には告げなかった。幼いからと言う事もあったが、物心ついた月若自身が、権太夫を本当の父と思うようになっていて、話し出すきっかけがなかったという事もあった。

また、更科の中に、こんな思いも芽生え始めていた。

(このまま、岩瀬の子として岩瀬を継いだ方が、月若様にとっては幸せかも知れない……)

塩谷の地に戻れば、原や国司と戦わなければならないだろう。けれども、ここにいれば、平和に郡司として暮らしていく事が出来る。頼純と弥生のような悲劇もないはずだ。

けれども、その頼純と弥生の無念を晴らさなければならぬ。

更科（ああ…　なんて運命の下に生まれてしまったのでしょうか…）  
何も知らずにスクスクと育っていく月若。その先に過酷な運命が待っていると思うと、更科は耐えられなくなるのだった。

そして、あつと言う間に月日は流れ、いつしか10年の時が過ぎ、月若丸は数えて13歳になっていた。すると、義父である岩瀬権太夫は、月若丸を元服させ、岩瀬太郎家村と名乗らせた。権太夫の妻も、実の子のように育ててきた月若丸の成長を喜び、元服の際にこう言った。

「このまま立派な武将になって、岩瀬の家を継ぐのですよ。」

これを聞いた更科は、岩瀬夫妻に強い恩義を感じていた事もあって、月若を塩谷に返らせる事をためらうようになっていた。

更科（このまま連れて行ったら、お館様や御台様がみだいさま悲しむ事になる…）

しかし、月若が元服したら塩谷の地に帰るのが堀江の家臣たちとの約束。それを破るわけにもいかない。更科が悩んでいると、権太夫は、更科に言った。

権太夫「月若がまだ元服していない事にすればいい。」

権太夫は、もう老齢で後継ぎがない。月若の元服を急いだのは、自分がいつ死んでも岩瀬の家を継げるようにとの権太夫の計らいだ。ただ、月若が元服すれば、月若に堀江の子である事を告げ、

塩谷の地に返さなければならぬ事は権太夫も解っていた。だから、そのように告げたのだ。

権太夫「出来れば、太郎にはこのまま岩瀬に残り、家を継いでもらいたい。わしもそう思うようになってきた。だが、堀江の子であり、源氏の子であるのは事実。わしも悩んでおる。」

そんなおり、更科の下に安藤太からの使者が来た。月若が13歳になり、そろそろ元服してもよい年になったので、元服するかどうかを確かめに来たのだ。

しかし権太夫と示し合わせた通りに、更科は、すでに元服した事実を隠して使者に告げた。

更科「今年の元服はないようです。お館様は、月若様の確かな成長を待って、来年か再来年に元服させる事を考えているようです。」

使者は、更科の言葉に疑いを持つこともなく、そのまま安藤太の下に戻って行った。

ただ、戻った使者の報告を聞いた安藤太は、少し不可解な思いだった。更科は、頼純と弥生の壮絶な死に様を最も近くで見ているはずならば、国司や重房に対する恨みは誰よりも強いはずなのに、元服を急がない事に慌てた様子もない。本当ならば、元服を急がせて、一日も早く塩谷の地に月若丸を返したいと思うはず。それが再来年の話までしている。

安藤太（まさか、心変わりしたわけではあるまいが…）

だが、長い歳月は人を変えるともいう。穏やかな生活に慣れ、月若

に対する思いが変わった可能性は充分に考えられる。

心配になった安藤太は、岩瀬に間者を送り込み、その様子を探らせただった。

それから1年の歳月が過ぎ、家村こと月若は14歳になった。安藤太は再び更科に使者を送ったが、更科の返事は「元服は来年になりそうだ」との答えだった。さらに更科は、こつも告げた。

更科「もしかしたら、私は約束を果たす前に命運尽きるかも知れませぬ……」

その頃、更科は病に侵され、たびたび病床に伏すようになっていた。それは演技などではなく、更科は、自分の命の終わりさえ感じていた。

ただ、もしこのまま自分が死んでしまえば、月若は完全に岩瀬の子となれるとも思っていた。約束を賜ったのは自分。その自分がいなくなれば、約束はなかったことになる。その方が月若様も幸せかも知れない。そんな思いさえ抱くようになっていた。

更科（これが天命やもしれぬ。ならば、全てを天命にゆだねよう…）

ところが、そんな頃だった。安藤太の間者が、すでに月若が元服していた事実を知り、これを安藤太に報告したのだった。これを聞いた安藤太は、怒る事もなく大きなため息をついていた。

安藤太「更科は、いつの間にか人の親になっておったか…是非もない……」

そこで安藤太は一計を案じた。この事実を岩瀬や更科に突きつけ月若様を塩谷に戻すようにしてもよかったが、それでは、月若は戻ってこないと考えていた。岩瀬権太夫や更科は、もう老齡の身。対立するような事をして意固地にさせれば、2人は、意地になってしまい、月若を返さないだろう。年寄りを意地にさせたら、説得はさらに難しくなる。

そこで安藤太は、1人の家来を僧の姿に変え、岩瀬の地に送り込んだのである。

それは、月若が15歳になった年の秋の頃だった。月若は夜、密かに岩瀬の館を忍び出て、静かに月を眺めていた。月若は、夜空を眺めるのが好きだった。

そこへ、1人の修行僧が現れた。月若は最初は驚いたが、特に殺気もなく、旅の修行僧と聞いて心を許した。修行僧は、月若に下野の塩谷の地からやってきた事を告げた。

月若「塩谷とは、どんなところだ？」

修行僧「あなた様の故郷にございます。」

月若「俺の故郷？ そんな馬鹿な。俺は……」

その修行僧は、安藤太が送り込んだ修行僧であった。そして修行僧は、月若に、その生い立ちと、なぜ岩瀬の地にいるのかを話した。

月若「ば、馬鹿な。では、俺は岩瀬の子ではなく、源氏の堀江の子だと言うのか!？」

修行僧「さようでございます。更科様にお聞き下さいませ。」

月若「そんな馬鹿な……」

館に戻った月若は、翌朝、更科の部屋を訪ねた。更科は、完全に病床に伏すようになり、外に出られないほどやつれきってしまった。た。

月若は、昨夜修行僧から聞いた話を更科にした。すると更科は、愕然とし、全てを悟ってそれが本当の話であると認めただった。

更科（これが天命なのですね……）

更科は、その修行僧が安藤太が送り込んだものであると感付いていた。そして、月若はやはり源氏の子である事が天命だと悟ったのである。更科は、全てを月若に話した。

更科「あなた様は、源氏の子でございます。塩谷の地に帰り、国司と原を討って、父頼純様と母弥生様の無念を晴らしてくださいませ。」

月若が部屋を出て行き1人になると、更科の目からは涙が溢れた。

更科「頼純様、弥生様……申し訳ござりませぬ……」

そして更科は悟った。自分の役目は、もう終わったのだと。月若に事実を告げたのは、実は安藤太などではなく、天にいる頼純と弥生の導きであったのだと。自分が生きていれば、これ以上月若様を不毛に迷わせる事になる。もう自分は去らなければならぬ。

更科（私が愚かでした……ただ……ただ、願わくば、弥生様のおそばに行かせて下さいませ……）

更科が、この世を去ったのはその翌朝の事だった。夜眠りについて、そのまま逝った。微笑んでいるかのようにさえ見える穏やかな死に顔であった。

そして、全てを知った月若は、ついに更科の遺言に従う覚悟を決めたのだった。

## 月若の上洛

更科の葬儀が終わると、月若は、権太夫に目通りして言った。

月若「すべては更科から聞きました。私が、源氏であり、堀江頼純の子である事。そして、この仇を討てと言って、更科は逝きました。今まで大変お世話になりましたが、岩瀬を離れる不幸をお許しください。」

月若の決意を聞いた権太夫の隣で、権太夫の妻は、ついにこの時が来てしまったかとむせび泣いていた。出来れば、ずっと我が子のままでいて欲しかったという思いからだった。

権太夫「そうか。更科は、討てと言い残して逝ったか…」

権太夫は、これが定めか…と大きくため息をついた。

権太夫「すべて知ってしまったからには仕方ない。止める事は出来ぬ。ただ、何の身支度も供もないままに行かせるわけにはいかぬ。立派な武将として、塩谷の地に帰るが良い。」

月若「ありがたき幸せ…」

月若にとっても、父と母の悲しむ顔を見るのはつらかった。運命など知らねば、岩瀬で土になっても良かった。しかし、知ってしまったからには、武士として行かなければならない。

権太夫は、月若の出立の準備を進める一方で、安藤太に使者を送った。

すると安藤太から意外な返事が返ってきた。それは塩谷の地には帰ってくるなというものだった。ただ、その判断は、実に冷静なものだった。

安藤太は、まず塩谷の地に来るのではなく、上洛して、朝廷より国司追討の許しを得てくるように説得してきたのである。ただ帰ってきて戦を起こしても、ただの反乱にしかならない。国司や重房を討つには大義名分が必要である。父頼純を討たれた不当を訴えて、朝廷の許しを得なければ戦う事は出来ない。安藤太はそう考えていたのである。

この安藤太の考えに権太夫は感心した。

権太夫（なんとという冷静な男よ。この者ならば、月若を正しく導き、大願成就させる事が出来るだろう。）

安藤太は、下野には入らず、源氏の影響力が強く、行利の影響力が最も弱い常陸国から東海道に入り上洛するように月若に伝えた。月若は、これに従い、権太夫がつけた従者とともに間もなく岩瀬の地を旅立った。

時に保延<sup>ほじえん</sup>6年（1140年）の事である。

月若の消息をつかめていなかった行利は、まさか月若が元服をして自分を討つために行動を開始したなど、知る由も無かった。月若は、行利が国司を務める常陸国を、さしたる妨害も受ける事なく順調に通り過ぎ、常陸から武蔵と抜け、やがて、月若の一行は上田山に差し掛かった。

月若「ここでわが父が討たれたのか…」

上田山には、そんな戦が行われたことなど忘れたかのように、穏やかな時が流れていた。戦跡らしいものも全く見当たらない。

家来「さぞや、父上は無念だった事でしょう。」

月若「そうかも知れぬ。だが、俺は、父の顔を覚えていない。母の顔も… だから、不思議と心穏やかでいられる。本当は、子としてはそうであってはならないのだろうけどな。」

家来「…」

月若「それに、父は敵将の全てを討ち取ったと聞く。あれから10年以上の歳月も過ぎて、あるいは、父の無念も晴れているかも知れぬ。」

家来「若、それでは…」

月若「いや、仇討はやめぬ。これは、俺の問題だ。父の無念を晴らすのではなく、源氏の将として、成すべきことを成すだけだ。」

家来「近くに死者が葬られた回向塚があると聞きます。立ち寄りますか？」

月若「いや。このまま行こう。」

月若は、上田山の頂上で、天竺の方角である西に向かって念仏を唱えた。その方角は、父が目指した京の方角でもある。

月若「南無八幡大菩薩…」

そして月若の一行は南下して海に出た。そこにあったのは、父頼純が目指した海であった。上田山を越えていけば、頼純と弥生が見ていたはずの光景を横目に、月若は潮風に吹かれながら、そんな思い入れのある場所とも知らずに通り過ぎていった。

その後も、特に困難もなく旅は進み、予定よりも数日早く月若の一行は都である京に入った。安藤太は、すでに宗綱に手を回して、月若の入京がスムーズに進むように手を打っていた。そして月若は、朝廷に父頼純が討たれた不当性を訴え、国司と重房の追討の許しを願いだしたのである。

ただ、裁可はすぐには下りなかった。そうした訴えや陳情は全国からあつて、手続きに手間取った事もあつたが、それ以前に月若は無位無官であり、優先順位で、訴えが後回しにされたという事があつた。

それよりも厄介だったのは、京が今、二大勢力の対立によってキナ臭い状況になっていた事だった。

当時は、崇徳天皇の御世であつたが、政治の実権は、院政を敷いていた鳥羽上皇が握っていた。この両者が対立していたのである。鳥羽上皇は、系図上は崇徳天皇の父親に当たり、鳥羽天皇の譲位によつて、崇徳天皇はわずか5歳で即位するが、これは、鳥羽天皇の本意ではなかつた。

この譲位を決定したのは、鳥羽天皇自身ではなく、当時院政を敷いて政治の実権を握っていた白河法皇であり、鳥羽天皇にとっては祖父にあたる。そして、鳥羽天皇自身も、白河法皇の意思により5歳で天皇として即位するが、所詮は、白河法皇が実権を掌握し続けるための傀儡に過ぎなかつた。

白河法皇は、鳥羽天皇が20歳を超え自分の意思を持ち扱いづらくなつてくると、鳥羽天皇を退位させて、5歳の崇徳天皇に譲位させたのだつた。ただ、この崇徳天皇、実は、鳥羽天皇の子ではなかつたとされている。崇徳天皇が生まれた時、鳥羽天皇はわずか17歳、

これは数え年なので、現在で言えば16歳であった。現代でも、16歳の父親がないわけではなく、当時でもそうなのだが、確かに早かった。

崇徳天皇の母親は、藤原璋子ふじわらのしちこと言い、崇徳天皇を生んだ時、数え年で19歳（現在で言えば18歳）であったが、この璋子は、白河法皇の養女として7歳より育てられ、数えで17歳の時に白河天皇の命により鳥羽天皇に嫁いでいるが、実は、白河法皇の寵愛を受けていて、崇徳天皇は、白河法皇の子であったと言われている。

そのため、白河法皇にとっては扱いやすく、鳥羽天皇にとっては、崇徳天皇はうとましい存在であった。

ところが、その崇徳天皇の後見となっていた白河法皇は、大治4年（1129年）7月7日に崩御すると、それまでの崇徳天皇と鳥羽天皇の立場は逆転する。当時、崇徳天皇がまだ11歳と若かった事を良い事に、鳥羽上皇は、院政を敷き、全ての権限を掌握してしまつたのである。

その崇徳天皇も、月若が上京する頃には成人し、次第に実権を掌握する鳥羽天皇と対立するようになっていた。そんな政争の最中に、月若は上洛したのである。

しかし、月若側は、この事態をも利用しようとしていた。シナリオを描いたのは、もちろん安藤太であった。安藤太は、当時の政治情勢を正確に把握しており、国司である行利が、この両陣営の対立において、崇徳天皇側になびこうとしていた事を察知していたのである。

そこで安藤太は、届け出を鳥羽上皇にするように月若に告げていた。

そうすれば、国司討伐の院宣を得やすいと考えていたのである。この安藤太のもくろみも、見事に的中した。

いよいよ、月若の訴えの審議が始まると、鳥羽上皇は、たちまち行利討伐の院宣を下したのである。

そして、院宣が月若に下された。

月若「はは！　ありがたき幸せ！！」

こうして、月若は、鳥羽上皇の院宣を得て、下野国に帰る事になった。目指すは、今度こそ塩谷の地。まさに十数年ぶりに、月若丸が塩谷に帰ろうとしていたのだった。

## 武者嶽の戦い

行利が、頼純の遺児月若が生きており、上洛した事を知ったのは、月若が行利追討の院宣を受けた後であった。慌てた行利は、ただちに重房を呼び寄せ、軍勢を整えるように命じた。行利は、狼狽ぶりは激しかった。まさか、国司である自分に追討の院宣が下るなど、想像だにしていなかったからである。

行利（おのれ堀江め。返り討ちにしてくれるわ。）

一方、安藤太は、すでに堀江の軍勢を結集しており、いつでも戦える状態に準備していた。行利側の動静も、間者を放つて逐一正確に把握していた。そして、行利の動揺を悟っていた安藤太は、焦る行利に塩谷に攻め込ませて戦う方が有利だと考えていた。戦い方も決まった。

あとは、月若の塩谷入りを待つだけだった。

その月若が塩谷に戻ってきたのは、永治元年（1141年）の事であった。安藤太の事前工作と巧みな導きで、行利の妨害を受けずに塩谷入りを果たした。

堀江山城に入った月若は、堀江の家臣たちと面会した。

安藤太「お待ちしておりました。月若様…」

月若「そちが安藤太か。更科より話は聞いておる。」

その安藤太の裏には、父頼純が養った最強の軍団である堀江十勇士の面々が連なっていた。

月若「安藤太。私は、知らなかったとは言え、一度、養父岩瀬権太夫の下で元服し、岩瀬太郎家村という名を名乗ってしまっている。だが、私が源氏であり、堀江の子であると知った以上は、改めて堀江の名で元服したいと思っている。」

安藤太「は。」

月若「ついては、そちに烏帽子親えぼしおやになつてもらいたい。」

烏帽子親とは、元服の際の後見人の事である。月若は、これを安藤太に頼んだ。

その日の夜、月若は二度目の元服式に望んだ。そして、岩瀬家村の名を改めて、堀江ほりえ惟純これずみと名乗った。

この時、惟純は、歌を一首読んだ。

いにしへの 月は変わらぬあとなるを

ひとりのこりて見るぞ悲しき

これを聞いた家臣の中には、込み上げてくるものを堪えきれずに、むせび泣く者もいた。理不尽に主君を討たれながらも、その無念を隠し、恥を忍んで生きながらえてきた苦難が、今、ようやく報われようとしている。

惟純「これより、我が父母のかたき、国司と原重房を討つ。俺は、これが初陣となるが、皆の者、頼むぞ。」

ははーっ！！！！

そして堀江の家臣たちは、この夜だけは無礼講と、決戦前夜を宴で

飲み明かしたのだった。

翌朝、惟純は、あらかじめ安藤太が整えていた軍勢を率いて堀江山城を出、安藤太の居城である長井城に入った。この長井城は、現在、長井城跡として伝わる矢板市長井の旧長井小学校裏手にあつた長井城ではなく、かつて下長井にあつた長井城の方である。

そして、その長井城の傍にある、かつて源頼義公と義家公の父子が創建した剣神社に参拝した。義家公は、惟純の曾祖父に当たる。

惟純「南無八幡大菩薩… 武運を我に…」

惟純は、その神前で戦勝を祈願した。

安藤太「若、これより武者嶽むしやがたけに向かいまする。」

惟純「武者嶽？」

安藤太「我らが信仰する寺山観音寺にある山にござりまする。ここに国司と原の手勢をおびき寄せ、敵を討ちまする。」

寺山観音寺とは、神亀元年じんき（724年）に時の聖武天皇の勅願により行基によつて建てられた寺である。その後、落雷による焼失や移転などを経て、長井の寺山の地にあつた。しかし、長い歳月を経て寺はずいぶんと廃れてしまっていた。安藤太の保護で、何とか寺の命脈だけは保っていた感じであつた。

惟純の手勢は、長井の奥地にあるこの寺山の地に入った。その数は約200騎程度であつた。

他方、惟純が塩谷入りを果たし、寺山に籠った事を知った行利は、原重房に命じて、これを攻めさせた。原重房は、名目的には今も塩谷郡の支配者である。重房は、堀江勢の倍以上の500騎を率いて、寺山の地に迫った。

しかし、重房の心中は複雑であつた。未だに、頼純と弥生に対して罪悪感を抱いていたのである。本当に申し訳ない事をしたと心から後悔していた。重房は、弥生が死んだあの日以来、罪を悔いて毎日、頼純と弥生のために念仏を唱えていた。そんなことでは許されない事は解つていたが、そんなことくらいしか出来なかつたのだ。

重房は、いつの間にか、ただただ不器用に生きるだけの老父に変わり果ててしまつていた。そして、こんな願いまで持つようになっていた。

重房（弥生と頼純の子に会つて、一目見たい…）

今更何を白々しい…というのは、重房にも解つていた。けれども、本当に今更だつたが、自分の孫であり、頼純と弥生の子である月若丸の成長した姿を一目見たかつた。それは、重房の中にあつた親心であつた。親心なんて振りかざせる立場ではないが…

この戦で、重房は、ある決意を固めていた。

惟純は、寺山観音寺の裏手の丘陵に本陣を置き、原勢を迎え撃つ態勢を整えていた。寺山観音寺自体、山の上にあるのだが、さらに奥が小高くなつていたのである。

そこに重房率いる500騎の手勢が迫つた。

安藤太がこの地を決戦に選んだのは、山上ならば戦いに有利な事に加えて、山奥ならば、原勢が逃げにくくなり、敵勢をより多く討ち取りやすいと考えたからである。

そして重房は、武者嶽の上に惟純の軍勢を確認すると、休む間もなく総攻撃の命令を下した。

重房「敵は少数ぞ！！ 討ち取れい！！！」

すると原勢500騎は、おおー！と鬨とぎの声を挙げながら、一気に山頂に向かって突撃を開始した。それを十勇士率いる200騎の堀江勢が迎えうった。

当然ながら、山であれば、下から攻め上がるより、上から迎え撃つ方が有利であり、序盤戦は原勢が押され気味であった。これは攻めていた原の将兵たちも解っていた。それを堪えて、相手の隙をつき数で押していく。それが戦の常道であり、受けていた堀江勢も、それを想定していた。

ところが、ここで重房が不可解な指揮をとった。

重房「このまま戦えば、我が手勢は全滅ぞ。全軍退け！！」

そう言って、自らの旗本たちとともにその場から逃げ去ってしまったのである。戦いが始まって、緒戦と語るほどの長さの時間も経っていないかった。これに原の兵たちは動揺した。今は不利であったが、数で勝っているのだから、時間をかければいくらでも勢いを盛り返すことは出来る。なのに、それに堪える事もなく撤退とは、考えられなかった。むしろここで背中を見せる方が危険である。

にもかかわらず、重房は、あつけなく背中を見せた。大将の逃亡に原勢は、一気に総崩れとなった。大将である重房が逃亡しては、立て直しもきかない。

これを見た安藤太は、惟純に言った。

安藤太「若つ、今です！！ 総攻撃を。」

惟純「皆の者！！ かかれい！！！」

おおー！！！！

堀江勢が、一気に山を駆け下りる。原勢は逃げるしかなかったが、山奥に追い込まれては、思うように逃げられず、背中を向けた原の兵たちは次々と討ち取られていった。

その間、真つ先に逃げ出した重房は、わずかな手勢とともに板鼻城に向かつて走り去っていた。

こうして、武者嶽の戦いは、あつけなく終わった。原勢は半分以上が討ち取られ、堀江勢の被害はわずかであった。惟純の初陣は、大勝利に終わったのである。

ただ、安藤太は怪訝けげんな思いであった。

安藤太（なぜ、こつもあつさりと退いたのだ： こんな事をすれば負ける事など、重房ほど老練ならば解っていたはずなのに：）

そして惟純は、この勢いに任せ、そのまま軍勢を率いて板鼻城に向かったのだった。



## 重房の最期

板鼻城に戻った時、重房に従っていたのは、わずか5名の家来だけであつた。500騎で出陣したのが、今はその100分の1だ。

だが、板鼻城には、そんな重房を出迎える家族はいなかった。重房の妻も、失意のうちに亡くなっていた。家族をなしがしるにすれば、家族を失う。ましてや殺したのだから尚更だ。妻も子もすべて失つた。因果応報、当然の報いだ。

そして重房は、城内の者にふれを出し、城を退去するように命じた。

重房「間もなく堀江の手勢がここに押し寄せてくる。お前たちは逃げるのだ。」

家来「なぜにござりまする？ まだ城には、手勢は残っております。籠城して、国司様の援軍を待てば、まだまだ戦えまする。」

重房「いや、もう良い。もう良いのじゃ… わしはもう戦うつもりはない。これ以上、無駄な犠牲を出す必要はない。」

家来「お館様だけを死なせるわけには参りませぬ。」

重房「いや、わしだけでよい… これ以上はいらぬ…」

重房は、説得を聞かぬものは後回しにし、城内にいた女中など全ての者を広間に集め、全員に暇を出し、城外に出るよう命じた。その際、蔵に残っていた財産や食料などを、全て暇を出した者たちに分け与えた。

重房「皆の者、これまでわしに忠勤を尽くしてくれて、本当に感謝しておる。これより堀江の手勢が攻めてくる。わしの孫じゃ…！立派になつて攻めてくる。わしも人の親だったようじゃ。孫の成長

が嬉しいし、わしは孫の願いを叶えてやりたい。そういうことじゃ。皆の者、本当にありがとう。さらばじゃ!!!」

重房の言葉に、そこに集まった誰もがむせび泣いた。そして重房の意思が固いのを見ると、家来や女中たちは、1人また1人と城を去って行った。しかし、年寄りの家来が1人だけ重房の傍に残った。

重房「おぬしは残るのか。」

その言葉に、その家来は、主君であるはずの重房に対して、

「当たり前じゃ。お前だけ行かせるか!!!」

…つと、おそれる事もなく笑って言った。それは、重房の幼い時からの悪友の平次郎<sup>へいじろう</sup>であった。

平次郎「わしは今、おぬしより暇を出された。ならば主君でも家来でもない。また昔の悪ガキ仲間じゃ。」

重房「…そうじゃのう。あの時の仲間に残っておるのは、わしとお前だけじゃ。」

権力に溺れ、迷い、そして子供たちに殺し合いをさせた重房にも、思えばそんな時代があった。身分など気にせず、やりたい放題のいたずらをして大人を困らせ、遊びたいだけ遊び、お互いに夢を語り合った… そんな時代があつて、そんな時代を共に駆け抜けた仲間がいたのだ。

平次郎「そうじゃ。みんな死んでいった。畳の上で眠るようにな。じゃが、わしとお前は、城を枕に討死じゃ。死んだら、あの世で自慢してやるつぞ。」

重房「そうじゃのう。まさに武士の本懐。わしらの死に様の方が、あいつらよりずっと様になつとるの。」

2人は、堀江勢が迫る中、広間で酒を酌み交わした。

重房「これが末期の水ならぬ、末期の酒ぞ。」

平次郎「馬鹿言え。あの世に行つたら、また昔の仲間と飲むのじゃ。末期の水にしてたまるか。」

重房「そうか… そうじゃのう…」

そして2人は、思う存分、昔話に話を咲かせた。

やがて… 板鼻城の外が騒がしくなった。大勢の軍勢の関の声と馬のいななきが聞こえてきたのである。

平次郎「いよいよじゃのう。」

重房「…」

重房と平次郎は、静かに酒杯を置いて刀を取った。

しかし、城を囲んだ堀江勢は、すぐには城を攻めなかった。安藤太が止めていたのだ。安藤太は、このたびの重房の行動が不可解でならなかった。もしかしたら、板鼻城におびき寄せ、返り討ちにする策略かもしれないと警戒していたのである。

だが、誰もいなくなった板鼻城は、まるで廃墟かのように静まり返っていた。それも安藤太は敵の謀略のようにも見えた。さすがの安藤太も疑心暗鬼に陥っていた。

惟純「まだ攻めてはならぬのか。見れば、板鼻にはほとんど兵はいない様子。このまま攻めれば簡単に落ちるぞ。」

安藤太「お待ち下さい。」

安藤太は、全てを自分の目で確認せずにはいらなかった。惟純を制すると、自らが重房降伏の使者となる事を願い出た。

惟純「降伏とは… 重房を許すつもりか？」

安藤太「重房殿は、若にとつて祖父に当たります。無下に殺せば、義理も情もないと思われ、のちのち親殺しのそしりを受ける事もありましょう。まずは、降伏を進めて、それでも断れば討ち取る事もやむを得ませんが、ここは、若の慈悲を見せておくべきでしょう。」  
惟純「… あいわかった。」

ただ、安藤太はもつともらしい事を言つてはいたが、本心は、解らない事だらけのこの状況を理解するために、城内を見ておきたいというのが本当だった。

安藤太は、2人の家来とともに板鼻城に向かった。大手門の前、安藤太は、大声で名乗りを上げて使者としてやってきたことを伝えるも、返事が全くない。それどころか、人気すら全く感じなかった。

ためしに門を開けると、力なく門は開いた。城内は、本当に誰もなく閑散としていた。

家来「もしや、もう逃げたのでは？」

安藤太は、慌てて城内に入り、その様子確かめたが、本当に誰もいなかった。蔵の中も空っぽだ。だが、それもおかしかった。普通、城を捨てて逃げる時は、敵に奪われてもすぐに利用されないように、

城に火を放って逃げていくものだ。無傷のまま敵に手渡すことはありえない。

考えれば考えるほど、安藤太には理解出来なかった。

安藤太（いつたいたいどういふ事じゃ…）

そして安藤太は、城の広間に足を踏み入れた。するとそこには、静かに上座に座っていた重房と、その下手で控える平次郎がいた。

重房「おぬしは… たしか安藤太。」

その声掛けに、安藤太は、重房の前にひざまずいた。

重房「おぬしがわしを討ちに来たのか？ 月若ではないのか？

安藤太「わたくしは、惟純様の使者にござります。」

重房「惟純… おお、月若か。そうか。わしに降伏を勧めに来たか？」

安藤太「左様にございます。」

重房「見ての通り、城内には誰もおらぬ。城内の者には、残っていた米や金を分け与えて暇を出した。残っているのは、わしとこの平次郎だけじゃ。攻めれば、簡単に城は落ちるぞ。」

安藤太「なぜにございます！？」

安藤太は声を荒げた。

安藤太「なぜ、あのような事を…」

重房は、安藤太が何を言いたいのか、全て悟っていた。

重房「さすがの智将安藤太も解らぬようじゃのう。いや、智将だからこそ、不合理な事になると、とんと見えなくなるのだらう。答えは至って簡単じゃ。月若は、わしの孫だからじゃ。」

安藤太「……」

重房「わしは、月若の成長を喜んでおる。じゃから、孫に花を持たせただけじゃ。」

安藤太「それでわざと負けたと。自らが命を捨てる覚悟で……」

重房「それが、最後に残されたわしの仕事じゃ……いや、この世では最期じゃが、わしにはまだ仕事が残っておる。あの世に行つて、頼純と弥生に詫びねばならぬ。」

安藤太「……」

重房「安藤太よ。ここに月若を連れてこい。わしが月若に討たれて、堀江の新しき世は始まるのじゃ。」

安藤太は、ようやく全てを理解した。そして、あまりにも不器用な重房の生き様に同情すらした。

安藤太（なぜ、このようになってしまったのか……皮肉なものだ……）

そして安藤太は、本陣に戻ると、惟純と十勇士たちを連れ、再び城内に入った。広間では、重房がどんとあぐらをかいて真ん中に座り、惟純を待ち構えていた。

重房「おぬしが月若か。ずいぶんと大きくなったものじゃ……」

惟純「黙れ重房っ。わが父と母を討っておきながら白々しい……！わしがその首討つてくれる……！」

重房「斬れるものなら斬つてみい……！」

重房は、刀を執とうともせず構えたままだった。若い惟純は、刀を構えると、一気に重房に斬りかかった。

惟純「覚悟！！」

惟純の刃が、重房を斜めに切り裂いた。溢れる血しびきが惟純を襲った。しかし、重房は微動だにせず、ぐつと惟純を睨みつけていた。

重房「月若よ。その程度では、人は死なぬ。人は斬れぬ。この年寄りすら討てぬぞ。おぬしの刀は、そんななまくらか？」

惟純が斬ったのは、重房の皮と肉だけだった。惟純は、これまでも人を斬った事はなかった。

重房「月若：いや、堀江惟純！！ おぬしは、本当に人が斬れるのか！？ 本当に武将になれるか！？」

たきつけられた惟純は、我を失った。

惟純「うおおおおお！！！！！！」

次の瞬間、惟純は、無我夢中に何度も重房を斬りつけていた。自分でも何回斬ったか解らないくらいに斬りつけていた。それを安藤太や十勇士、そして平次郎は黙って見ていた。そして…

惟純が気付いた時、重房は、血まみれになって、それでもドンと座ったまま絶命していた。

惟純「はあ、はあ…」

息も切れ切れの惟純に安藤太が厳しい声で言った。

安藤太「若、みしるしを！！」

その声に、惟純は、重房の後ろに回って刀を構え、すっと刀を振り下ろし、重房の首を落とした。

これを見届けた平次郎は、惟純に向かって笑顔を見せて言った。

平次郎「さすが源氏の大将でござる。しからば、わしは、主君重房の後を追いまする。御免。」

すると平次郎は、刀を自らの腹に突き刺した。安藤太は、静かに平次郎に近付き、その首を介錯した。

安藤太「若、皆の前で勝鬨を…」

惟純は、刀に重房の首を突き刺すと、それを持って自らの手勢たちの前に立った。

惟純「この堀江惟純つ、原重房を討ち取つたり！！！！」

えいっえいっおーっ！！！！

えいっえいっおーっ！！！！

えいっえいっおーっ！！！！

板鼻の城に、堀江軍の勝鬨が響き渡った。



## 源姓塩谷氏の誕生

下野国府は、現在の栃木県栃木市田村町にある宮延神社付近にあった事が、昭和54年（1979年）の発掘調査で明らかになった。昔から都賀郡にあるとだけ伝えられていたが、この時、具体的な場所が判明した。都賀郡の「都」という字も、この辺に由来しているのだろう。

もともと、最初からここに置かれていたわけではなく、昔は思川の西岸、古国府ふるくにという地名の場所にあつたらしい。いつ頃から、国府として機能していたかは解らないが、続日本紀によれば、宝亀4年（773年）に火災で焼失した記録が残っている。

しかし、平安時代末期になると、その機能もほとんど失われ、国府自体も廃れ始めていた。国司の立場も形骸化し、支配と言うよりは朝廷との調整役程度の役割しか果たしていなかった。重房を失った行利には、もはや味方する者は誰もいなくなっていた。

それでも行利にはプライドがあつた。中納言という身分であり、自分は公家の高貴な身分であり、下等で野蛮な下野武士などに負けるわけがない。そう信じていたのである。

一方、惟純の下には、北下野の諸将が駆けつけ、その軍勢は1000騎にもなっていた。宗綱自身は参陣していなかったが、その中には宗綱の援軍もあつた。この時代の1000騎は、のちの戦国時代の1万騎に相当するような大変な数である。

惟純は、重房を討った後、いったん塩谷に帰り、六房寺の頼純と弥生の墓前に重房の首を供えた。そして、重房の首塚を作り、ねんご

ろに弔った。

初めて人を斬った惟純は、これでやっと自分も一人前の武士になれた気がした。そして、重房に対する思いが少しずつ変わっていた。そこに、重房を祖父のように思う気持ちが芽生えていたのである。実際、重房は祖父なのだが、討つまでは、ただの父母のかたきであり、祖父であるなんて感情は微塵もなかった。けれども、重房を討った後：いや、重房は、まだ人を斬った事がない自分のために、自らの命でそれを教え、本当の武士にしてくれた気がしていた。

そして惟純は、すぐさま塩谷の地を経ち、諸悪の根源である行利がいる国府へと向かった。

この間、行利は、妻を得て2人の子を産んでいた。11歳と9歳になる男子であった。その長男の方は左馬介ひだりまのすけと言った。現代で言えば、10歳と8歳の幼い子らは、鎧を着て戦う準備を整えていた。行利は、妻と子らには逃げるように言ったが、妻も子もこれを拒んだ。

左馬介「父上、国司の子として、わたしは戦いとうございます。」  
行利「さようか。ならば止めぬ。」

行利は、事ここに至っても、まだ負けを認めてはいなかった。従う手勢は100にも満たなかったが、諸將に書状を発し、誰かが助けに来てくれると信じていたのである。その根拠は、自らが高貴であり、下僕は上の者を助けるのが当然という思いだけだった。

だが、当然、誰も助けになど来なかった。世の全てが、すでに行利という男を見限っていたことに、行利自身が気づいていなかったのである。

堀江勢が国府を取り囲み、行利は、完全に逃げ場を失っていた。

行利「なぜじゃー！！　ワシは帝より信任された中納言ぞ。なぜ誰も助けに来ぬ！？」

最後の最後まで哀れな男であった。

堀江勢が国府になだれ込むと、行利の手勢はほとんど戦う事もなく降伏。行利や妻、2人の子は、自害する間もなく捕虜となった。

行利と妻、2人の子は、縄を打たれて惟純の前に引き出された。

行利「何をするかつ無礼な！？　わしは国司であるぞー！！」

惟純「黙れ逆賊。すでに貴様を討つ院宣は受けておる。」

行利「逆賊！？　このわしが逆賊か！？　下郎のくせにー！！」

これを見ていた堀江の家臣たちはいきり立った。そして安藤太は、2人の子を引き出し、行利と妻の前に並べて座らせると、すつと刀を抜いた。

惟純「斬るのか！？」

驚いたのは惟純だった。国司の行利の首だけを取ればよいと思っていた。見れば、2人とも自分よりも幼い子供。それを殺すのは、惟純には忍びなかった。

安藤太「これも堀江の安泰のため。」

しかし、安藤太は、2人を生かしておけば、いずれ大きくなって、

惟純に仇を為すと考えていた。惟純が重房を討ったように… だから幼子といえども容赦は出来なかった。

左馬介「父上！！ 母上！！」

左馬介は、恐怖のあまり暴れ、涙を流して叫んでいた。

弟はもつとろたえていた。

妻が叫んだ。

「どうか！！ どうか子供たちだけはお助けを！！」

だが… 安藤太は容赦しなかった。

堀江物語絵巻は、こう記している。

若君2人と御前に縄をかけてひきだし、

日頃の無念を晴れてあり、

これ見たまえと御目につけ、

御母上の目の前にて、

2人の若を刺し殺し…

左馬介が細首を宙にすんと撃ち落とす…

安藤太は、行利の目の前で頼純と弥生の恨みを晴らすかのように、

左馬介ら幼い兄弟を殺し、その首を落とした。

行利「左馬介！！！！」

妻「いやああああ！！！！！！」

だが、悲鳴を上げたのはその2人だけだった。堀江の兵たちは、2人の幼子の首が落とされると、どっと勝鬨をあげた。残酷だが、こ

れが戦の世のならい。子らには罪がないのに… そんな理屈は、非常な世には通用しなかった。

だが、安藤太は手を緩めなかった。次は、行利の妻を引き出して、別れを惜しむ間も与えず、その首を打った。

そののち又御前の御首を打ち落とし、  
一千余騎の者ども勝鬨をどつとあげける…

堀江物語絵巻は、その悲惨な光景を現在にこう伝えている。

そして、行利を生きながらに苦しめた後で、安藤太は国司の首を打った。

こうして全てが終わった…

堀江山城に戻った惟純は、晴れて塩谷郡の支配に復帰した。

安藤太「若、おめでとうござりまする。」  
惟純「うむ。」

惟純にとっては、人生観が変わるほどの激動の初陣であった。一回り大きくなれたと思う一方、重房とあの2人の子の最期の光景が忘れられない、そんな複雑な心境だった。

惟純（犠牲は…あまりにも大きすぎた…）

だが、念願は果たした。

安藤太「若、これよりわが家は、塩谷氏を名乗りなさいませ。」  
惟純「塩谷とな？」

安藤太「は。最初に塩谷姓を名乗り、我が家で代々継承していく事を宣言するのです。」

惟純「うむ、俺は堀江惟純ではなく、塩谷惟純となるわけだな。」  
安藤太「さようにござりまする。」

惟純は、安藤太の勧めに従い、以後、塩谷姓を名乗る事にした。源姓塩谷氏の誕生である。

以後、源姓塩谷氏による塩谷郡支配が始まるのであった。

## 第一章「堀江物語」 完

## 塩谷の堀江兄弟

塩谷惟純が塩谷郡に復帰して20年以上の時が流れていた。その間の治政は安定し、塩谷の地には穏やかな時が流れていた。

しかし、この時代は、源氏にとっては不遇の時代であった。

惟純の伯父為義の子、つまり従兄に当たる源義朝は、惟純が塩谷郡の支配を固めている頃、上総国かずさのくに（現在の千葉県）を中心に南関東で勢力を拡大し、上総御曹司として勇名を馳せていた。

そして仁平3年（1153年）、関東で最大の勢力を誇るようになって京に戻っていた義朝は、わずか31歳という若さで下野守に任命された。これは、父為義をも上回る出世であり、これが父子の軋轢を生むことになる。

保元元年ほげん（1156年）7月、時の崇徳上皇と後白河天皇の対立が激化して戦となると、義朝は後白河天皇側につき、為義は崇徳上皇側について袂を分かち、父子で雌雄を決する事になると、義朝の活躍もあって後白河天皇側が勝利。為義は、義朝の前に降伏し、義朝は父為義の助命を願い出るが、聞き入れられず、逆に処刑を命じられて、義朝は、為義だけでなく、為義についた弟や一族郎党の全てを処刑する事になった。いわゆる保元の乱である。

これが源氏の衰退を招く事になる。

この3年後の平治元年へいぎ（1159年）12月9日、義朝は、平治の乱を起こす。同29日には京で戦闘状態になるが義朝は敗退。明け平治2年（1160年）1月3日、家臣の裏切りにあつて殺害さ

れる。

この時、義朝には男女合わせて11人の子らがいたが、長男の悪源あくげ太義平たぎへいや次男の朝長あさながらは討死したが、多くの子は全国各地に散らばって雌伏する事になった。その中には、のちに源平合戦で活躍し幕府を打ちたてる事になる源頼朝みなもとのよりとましくねや義経などがいた。

ただ、義朝が亡くなって以降は、源氏の勢力は大きく衰退し、代わって平清盛を筆頭として平氏が台頭する事になる。

同じ頃、奥州の地では、奥州藤原氏もとがその支配を固め、清衡から基もと衡ひら、そして秀衡ひでひらへと、その当主は代替わりしていた。

保元の乱の翌年の保元2年（1157年）、家督を継いだ秀衡は17万騎の旗本を支配する奥州の王となり、その力は中央で勢力を拡大していた平氏ですら手を出せないほどに強大なものとなっていた。中央が混乱する間に平和であった奥州は力を蓄えていたのだ。

その象徴が、奥州の都である平泉であった。その人口は、当時の日本の都であった平安京次ぐもので、日本第二の都市にまで拡大し、また絢爛豪華な文化が花開いていた。

同じ源氏である惟純は、この源氏不遇の時代の影響を受ける立場ではあったが、塩谷郡は奥州に近く、むしろこの奥州繁栄の影響の方が強く、領地は大きく発展を遂げていた。

この間、惟純には2人の男子が誕生していた。嫡男これよりを惟頼これより、二男を惟広これひろと言った。兄の惟頼は学問に優れ、惟広は武勇に優れていた。兄弟はとても仲が良く、やがて兄弟は立派に成長し、嫡男の惟頼が惟純の家督を継いだのは、嘉応元年（1169年）の頃であった。

すでにこの頃には、平氏は全盛期を迎えており、その中心にいた平清盛は、仁安2年（1167年）には、従一位太政大臣にまで上り詰めていた。この太政大臣は、天智天皇の時代、その皇子であった大友皇子（弘文天皇）のために、皇太子や摂政に匹敵する役職として創設されたものであり、その敬称は、摂政と同じく太閤とする。太閤というと、後世の豊臣秀吉の影響で、関白を辞したものが名乗るものという解釈が一般的になったが、もともとは、摂政と太政大臣の敬称である。

これは名誉職ではあり、実質的な権力を伴うものではなかったが、天皇に次ぐ者として平氏が位置付けられたことを象徴とするものとなった。

その清盛は51歳となり、仁安3年（1168年）には病に倒れて出家してしまうが、その後も権力を掌握し、娘を天皇の妻としたり、当時の中国の王朝である宋との貿易（日宋貿易）を拡大したり、その権勢はまだまだ衰えを見せなかった。

平氏にあらざれば人にあらざ

そんな時代の中で、源氏は肩身を狭くしながら世情を細々と生き抜いていたのだった。

惟頼が家督を継いだ頃には、頼純、惟純の二代に渡って堀江家を支えた堀江十勇士の重臣たちは、老臣となり相次いで没し、家臣団の面々も、その子や新しい顔ぶれの若い世代に一新されていた。

その惟頼には、桔梗の方という美しい妻がいた。昔を知る者からは

弥生の生き写しとも言われるほどに美しく、その評判は近隣諸侯にまで広がっていた。惟頼は、この桔梗との間にすでに2人の男子をもうけ、幸せな日々を送っていた。

ところが、嫁の評判が良いと、なぜか姑や小姑が妬みを持つというのは今も昔も変わらないもので、惟頼の塩谷治政は安泰であったが、惟頼は、思わぬところで内憂を抱えていたのだった。

## 母御前の追放

かつて、頼純や惟純を庇護してきた宇都宮宗綱が亡くなったのは、惟頼が家督を継ぐ7年も前の応保2年（1162年）8月20日だった。その跡を継いだ宗綱の嫡男である朝綱は、専ら京ともつなにいて、勢力の拡大を図っていた。

平氏の時代となっても、朝綱は、世渡りを上手にして平氏に仕え、着実に地位を固めていた。それは、源氏の恩顧で宇都宮の地に本貫を得た宇都宮家にとっては、背信とも言える行為にも思えたが、それはすでに祖父宗円の話であって、孫の朝綱にとっては、その行動を束縛するものではなくなっていた。

離合集散は、いつの時代も世のならい。塩谷氏と宇都宮氏の関係も、惟頼の時代になると、希薄なものになっていた。敵対関係にあったわけではなかったが、平氏の時代にあつて、源氏である塩谷氏との関係は、朝綱にとってはあまり好ましいものではなかった。祖父の恩顧もあるので、むげにも出来なかったが、朝綱は、出来るだけ塩谷氏には関わらないようにしていた。

ただ、それでも北の支配を安定させないと、宇都宮の領地の安泰もない。父宗綱が塩谷氏を庇護してきたのも、単に過去の恩義に配慮するという事だけでなく、北の守りを安定させる意味が強かった。宗綱は、塩谷氏との友好関係に頼るだけでなく、新しい方策を考えていた。

それは、惟純が亡くなり、惟頼の代に変わったあとに実行に移された。

惟頼が支配する塩谷郡の南には氏家郷と呼ばれる一帯があった。ここを支配していたのが氏家氏という氏族であった。氏家氏は、紀氏を出自とする氏家公幹うじいえ きみもとにより11世紀中頃に創始された一族で、この時代、公幹から数えて4代目に当たる公広きみひろの代となっていたが、朝綱は、この公広に対して、自らの子を養子とする事を申し入れ、公広は、これを受け入れたのだった。

聡明な惟頼は、これが何を意味するのか理解していた。

宇都宮氏は、塩谷郡の直接支配に乗り出したのだ。このまま放っておけば、いずれ塩谷郡全土が宇都宮氏に飲み込まれてしまう。惟頼は、対抗策を模索し始めていた。

その一方で惟頼は、思わぬ内憂を抱えていた。

惟頼がその事に気付いたのは、恥ずかしくもつい最近の事だった。桔梗の女中が、惟頼にこつそりと訴えたのである。

女中「桔梗様が、母御前様ははごと由布様ゆふに虐げられ苦しんでおります。」

母御前とは惟頼の母の事。つまりは惟純の妻だ。由布は、惟頼の姉。桔梗が姑と小姑のいびりにあつていたというのだ。母も姉も惟頼の前では、優しい顔を見せていた。それを信頼していただけに、惟頼はにわかにそれが信じられなかった。

桔梗に聞いても、桔梗は、それを否定した。しかし、よくよく調べてみると、女中が言ったように桔梗は、惟頼のいないところで、2人にいびられ毎日苦しんでいた事が解った。しかも、城中には、桔梗の評判を落とすような悪い噂が蔓延していた。それも、2人が流

したものだつた。

惟頼は愕然とした。そういう事には疎かつたとは言え、妻の苦境に気付かなかつた自分に愕然とした。桔梗も、夫である惟頼に心配をかけさせまいと黙っていたのだ。それをいい事に、母御前と由布は、さらにエスカレートして、桔梗を苦しめていた。

惟頼が桔梗を問いただすと、桔梗は震えながら泣き崩れた。

桔梗「申し訳ありません… 私が至らぬばかりに…」

桔梗は、誰を責めるでもなく自分の事を責めていた。自分が嫁としてもう少ししっかりしていれば、こんな事にはならなかつたのだと、母御前と由布にさえ申し訳なかつたとさえ言った。

だが、惟頼をもつと愕然とさせる事実があつた。それは、桔梗が、その事を一人にだけ打ち明けていた事だつた。桔梗は、その者にだけ自分の気持ちを打ち明けて、相談に乗ってもらっていたのだ。

その相手こそ、惟頼の弟である惟広であつた。惟頼は、すぐさま惟広を館に呼び寄せた。

惟頼「どういうことだ？」

惟広「どういうこともない。兄上が、気付かなかつたから、俺が支えていたのだ。」

惟頼「なんだと!？」

惟広「姉上は、自分から打ち明けたわけじゃない。俺が、姉上の変化に気づいて聞いたなら、打ち明けてくれたのだ。兄上は、何も気づかなかつたのか？」

惟頼「…」

普段は冷静沈着な惟頼もこの時ばかりは取り乱していた。しかし、取り乱せば乱すほど、露呈するのは自らの不甲斐なさだけだった。

確かに最近では政務が忙しかった。あまり桔梗との時間を作れなかったのは事実だ。だからと言って、弟の惟広に気付けた事を自分が気付けなかった事の言い訳にはならない。むしろどんな時でも、誰よりも解ってやらなければならない立場の自分が気付けなかったことは、一生の不覚であった。

ただ、惟頼には、惟広に対する嫉妬心もあった。なぜ、よりによって惟広なのだと。武芸に秀でた惟広は、顔立ちも凛々しく背も高く、昔から確かに女性ウケが良かった。モテた。対して惟頼は、学問ばかりしていて目立たず、色白で、そういう面では、常に惟広の陰にいた。

だからこそ、桔梗が自分の妻となった時、初めて惟頼は、惟広に対してのそうした面での劣等感を払拭できたような気がしていた。桔梗は、誰から見ても、誰と比べても美しい。

しかし、今回の件では、そんな桔梗までをも奪われてしまったような気がした。惟頼は、それが悔しかった。学問や政治の世界では器用な惟頼は、この手の事に関しては、本当に不器用であった。それでも、その嫉妬心をぶつけたところで、空しくなるだけ。今回の件で言えば、桔梗の苦しみに気付かなかった自分が一番悪い。惟頼もそれは解っていた。

全てを把握した惟頼は、すぐさま行動を起こした。母御前は、父惟純の死ぬと出家していたが、惟頼は、菩提寺である六房寺の近くに新たな屋敷を作り、母御前と由布の2人を城から出し、そちらに移

したのである。

もちろん、2人はそれを拒否したが、惟頼は、強引に事を進めた。それだけ決意は固かった。何より、自分が最も大切に行っている桔梗を苦しめた事が許せなかった。桔梗は、そんな惟頼に自重を求め、2人が城に留まれるように懇願したが、惟頼は聞き入れなかった。

ここは、非情でも、いさぎよく決断した方が良い。惟頼は、そう考えたい。

だが、この処置は、新たな禍根を残す事になった。

## 惟広と桔梗の憂鬱

惟頼が家督を継いでしばらくは、平家の世が続いた。しかし、その平家の独占的な支配に対する不満は、確実に広がりつつあった。平家は、富と権力を独占し、平家以外の者にこれを分け与えなかった。

その不満を決定的なものにしたのは、承安4年（1174年）3月16日に平家一門の実力者である建春門院滋子けんしゅんもんいん しげこが、時の最高権力者である後白河法皇を連れて行った厳島への行幸であった。

今で言えば旅行だが、天皇や権力を有する院が、都を離れて遠出するなど前代未聞の事。万が一のことがあれば取り返しがつかない。しかし滋子は、そんな事に構わず、平家一門を連れてこれを強行したのだ。滋子は、平清盛の妻の姉妹であり、後白河法皇の妻であったが、この出来事は、平家の傲慢さを象徴する出来事になった。

母と姉を城の外にだし、嫁姑の争いは、いったん終息したかに見えるが、女の執念とは深いもので、事はそう簡単には済まなかった。いや、これで解決できたと思うのは、男の浅はかさかもしれない。

桔梗には解っていた。これでは何の解決にもならない事を。城から出したって、母や姉との関係が変わるわけではない。一緒に住まなくなっただけの話であって、家に冠婚葬祭や何らかの付き合いがあれば、事あるごとに姑や小姑と顔を合わせ無ければならないのだ。

桔梗は、2人を家から出すのではなく、出来るだけ仲良くやってい

きたいと思っていた。遠回りになるだろうが、それが一番の解決策だったことを知っていたのだ。

惟頼は、学問には優れていたが、そういう事には疎かった。2人を城から出して毅然とした態度をとったつもりだったが、母も姉も、そうは思っていなかった。そんな事をすれば、「桔梗が惟頼を使つてやらせたのだ」と思われる事は、普通の間感を持つているなら解りそうなものだし、実際に母と姉はそう思っていた。だが、惟頼だけが解っていなかった。

桔梗も解っていた。解っていたからこそ覚悟した。

(もう、修復は無理かも知れない…)

桔梗は、姑と小姑を家から出した嫁として汚名を着る事を覚悟していた。

ただ、そんな桔梗の苦渋を男でありながら、察する者がいた。惟頼の弟惟広であった。惟広は、武芸には秀でて、学問には疎かったが、場の空気を読み、人の心を察する事には、兄の惟頼の何倍も優れていた。

惟頼は、塩谷家の当主として、城を留守にする事が多かったが、留守を1人で守る心細い桔梗を支えていたのが惟広だった。

惟広「兄の行動は軽率すぎる。政治には鋭いが、こういう事には全くにぶい。」

母と姉の追放に関して、惟広は桔梗に対してはその本心を隠さなかった。今日も、1人で留守を守る桔梗のもとを訪ねていた。惟広は、

兄が留守の内に、母と姉が桔梗に対して何らかの行動を起こすのではないかと心配だった。

惟広「こんな事をして、恨まれるのは姉上だ。そんな事も解らないのか。」

桔梗「……」

惟広「姉上も解ってるだろう。はっきり言ってやれば良いのだ。」

桔梗「そんな事……出来ませぬ。私は、あの方の妻です。従うしかありません……」

惟広「じれつたい！！ 姉上だつて辛いのであろうが、それは言わないとだめだ。」

桔梗「言えたら……言えたら、こんな話は惟広殿にはしません。言えないから…… 私は惟広殿に聞いてもらっているのです……」

惟広「なぜ私なのですか？」

桔梗「私の気持ちを察してくれたのが惟広殿だったから……」

惟広「……」

桔梗も苦しかった。いつそ、夫の惟頼に全てを打ち明けようとも思った。でも、出来なかつた。政務で忙しい姿を見ると、私事で手を煩わせたくないという思いもあつた。言つても解つてもらえないだろう……そんな思いもあつた。妻だから、夫の事はよく解つている。夫の前では言えないが、惟頼は、やはりこういう事にはあまりにも不器用だ。

ただ、桔梗はそうではない思いにも気付くようになっていた。それは、惟頼の妻として、認めてはならない一線を越えてしまう気持ちだつた。

惟広にも似たようなジレンマがあつた。今回の一件では、反省すべき点があつた。それは、自分から兄に桔梗の苦境を話してしまつた

事。あれがきつかけで、母と実姉は城から追放された。あれは、あまりにも軽率だったと惟広は反省していた。

それが結果的に、今の桔梗を苦しめている。桔梗を苦しめたのは、兄の惟頼だけでなく自分もだ。そう思うと、胸が締め付けられるのだった。今、惟広の心の中は、桔梗の事でいっぱいだった。兄の妻である事は解つていても、その思いは止められなかった。桔梗が苦しんでいるかも知れない… そう思うだけで会わずにはいられなかった。

そんな惟広を、その一件以来、桔梗もますます頼るようになっていた。苦しい胸の内を誰かに聞いてほしい… 助けて欲しい… そんな思いを抱く度、桔梗は、惟広を思うようになっていたのである。

そして…

その日は、惟頼が役目で京に上るために城を出た日の事だった。惟頼は、長く城を留守にするので、弟の惟広を堀江山城の城代として、その留守を任せたのである。

その夜、惟広は晩酌をし、その相手を桔梗がしていた。夜も遅くなると桔梗は、酒や肴の用意をしていた女中たちに、後の事は自分でするから寝るようにと伝え、女中たちは下がり、部屋には惟広と桔梗の2人だけになった。

桔梗が新しい酒を持ってくると、惟広は、桔梗にも酒を勧めた。そして、桔梗の方をそっと抱き寄せた。

桔梗「惟広殿… いけませぬ…」

桔梗は、少し抵抗するそぶりを見せたが、惟広は桔梗を離さなかった。すると桔梗は、それを振りほどこうともせず、そのまま身を任せた。

惟広「姉上… いや、桔梗。なぜ、兄上の嫁になんかなったのだ。

なぜ…俺ではなかったのだ…」

桔梗「…」

惟広「俺の一生の不覚じゃ。悔やんでも悔やみきれない。俺のもとにおれば…」

桔梗「…もう後戻りは出来ません…」

惟広「いや！」

すると惟広は、ゆっくりと桔梗を畳の上に寝かせた。

桔梗「いけません…」

惟広「俺はお前が好きだ。」

桔梗「…」

桔梗は、静かに目を閉じ、惟広は、ロウソクの灯りを消した。そして、その身をゆっくりと桔梗の中に沈めていった…

それから2人は、何度か逢瀬を重ねる事になった。

やがて、桔梗に新たな子が出来た。それは男子の誕生であった。その翌年には、もう1人、年子の男子が生まれていた。すでに惟頼には、2人の男子がいたので、三男と四男になる。惟頼は、男子誕生が続くのはめでたい事として、これを大いに喜んだ。

しかし… 桔梗にだけは解っていた。これが、惟頼の子ではない事を… 惟広の子である事を。

その2人の男子は、のちに三男が義房、四男が頼房と名乗る事になった。この2人、塩谷家の本流の系図である秋田塩谷系図には名前がなく、惟広の子孫の系図である喜連川塩谷系図にのみ、その名が残っている。

## 蜜月の終わり

女同士の確執やしがらみと言うのは、昔から面倒だったようだ。これは、時代が変わっても変わらないらしい。男と女の確執や男同士の確執と言うのも、それなりに面倒なところはあるが、女同士に比べればマシかも知れない。

男は、人間と言う肉体の機能を向上させ、その遺伝子を子孫と言う形で継承する事に優れ、女は、その命を守る処世術に優れている。生物学的に言えばそういう事だが、前者の男の論理の場合、「だから男は浮気をする」という根拠にされてしまう事が多いが、確かにそういう事はあるのだろう。逆に女の確執やしがらみが面倒なのは、処世術を追及する性<sup>さが</sup>があるからだろう。

だから、恥や情の概念よりも生きる事が優先される。恥や情の概念が無いわけではない。だが、男のように、時に「生きて虜囚の辱めを受けるなかれ」として、恥や情のために命を落とすというほどにそれを貫きはしない。貫くのは、生き残り、その子孫を守り抜く事である。生きる事が優先されるから、例え友という情があったとしても、女同士だと、それが自分の実利のために優先されない事もある。だから面倒になる。

しかし、それは倫理的にどうこうという問題ではない。そもそも男と女の性の差なのだ。だから家庭と言う事で言えば、亭主関白の家庭がもろいのに対して、かかあ殿下の過程は円満に長持ちしたりする。男に家のかじ取りをさせると碌な事がない。男は、女に比べたら、その処世術はかなり御座なりだ。人間の肉体を鍛えるためには、時に危険を冒さなければならぬ。だからこそ、処世術に関する思考は、女性に比べて疎かになる。そんな男が家庭を担えば、家

庭も巻き込まれる。結果、安定は生まれない。

家庭に必要なのは、まずは安定である。家庭は、住処すみかであり、外で生きる人々にとっては、安らぎの場所である。そこが安定しなければ、どんな人間も精神的に崩壊していく。家庭とはそういう場所だ。だからこそ、生きるための概念、処世術が重要になる。だからこそ、かかあ殿下である家の方が家庭は長持ちする。そして、良妻なかかあ殿下の家は、必ず亭主関白でもある。夫を立てる処世術も知っているからだ。

全ての男がそうだとは言わない。全ての女がそうだとは言わない。ただ、オスとメスという事で言うならば、そういう事だという話だ。そして、家庭が円満ではない理由と言うのは、そこに求められるのだからと思う…

惟頼に追放された母と姉は、次第に惟頼と桔梗の夫婦を恨むようになり、それにつれて2人は、惟広に接近するようになっていた。惟広を立てて味方にし、いつその事、惟頼を廃して塩谷家の家督をも奪ってしまおうとまで考えていた。もちろん2人は、惟広と桔梗が情を通じていた事など知る由もない。惟広も、桔梗と情を通じている事を隠して、その立場を利用して母と姉に接近し、その情報を桔梗に流していた。

惟広は、惟頼が城を留守にするたび、その城代を任され、留守を守る桔梗と密かに情を結び合っていた。その度に惟広は、母や姉の事を桔梗に話した。それは、確かに桔梗の身を守るものだった。企みがあっても、事前にそれを避ける事も出来た。

けれども、それは同時に桔梗の心を苦しめていた。惟広は、桔梗を

思うからこそ、母や姉から聞いた事の全てを桔梗に話した。そうすれば桔梗の身を守れると信じていたからだ。だが、その中には、桔梗にとつては知りたくもない事実もあった。それは、母と姉の本心であった。

死ね… それは、2人の本心を象徴する一言であった。2人は、本当に惟頼と桔梗の事を恨んでいた。殺したいくらい憎んでいた。よりを戻す事など微塵もあり得ない。それが2人の本心であった。

それを知って、桔梗は絶望するくらいに悲しかった。自分だけでなく夫の惟頼まで憎しみの対象にしてしまった事。それこそ、実の母と姉なのに… よそから来た自分だけが恨みを買うならまだしも、惟頼まで… そして、無理とは解っていて、よりを戻したいと願っていた桔梗を、惟広の話を伝え聞く度、無情にも粉々に打ち砕いてしまうのだった。

桔梗（私さえいなければ…）

そう思う事もあった。いつそ、母と姉が仕掛ける罠にわざと落ちて、死んでしまおうかと思う事さえあった。しかし、それを行動に移そうとしても、それは惟広によって未然に防がれた。

2人の本心を知らなければ、今でも、無理なんて思わずに、母子姉弟の和解を夢見ていられたかも知れない。結果的に無理だったとしても、その方が幸せだったかも知れない。知らない方がいい事というのは確かにある。けれども、惟広が伝えてくれるから… 桔梗は、人間不信に陥り、誰も信じられない絶望の淵へと徐々に落とされていった。

惟広との関係も終わりにしなければ… そうすれば、母と姉の本心

をこれ以上聞き続けなくて済む。そもそも夫である惟頼に対する背信であり、こんな関係を続けていく事は当然許されない。もし、夫に知られれば、自分だけでなく、惟広にも累るいが及ぶ。そうなれば、家族は、ますます崩壊していく。また自分のせいだ…

桔梗「惟広殿… 今宵で、もう終わりにしましょう…」

桔梗が最初にそう切り出したのは、惟広との間に最初の子、系図上では惟頼にとつての三男が生まれて間もなくの事だった。この子が、惟広との子である事は、桔梗も惟広も解っていた。桔梗は、罪の意識にさいなまれ、一番苦しんでいた時期だった。

けれども、別れる事は出来なかった。守らなければならぬものがある… 決して夫に不満があるわけではない… それが解つていながら、惟広を失う事も怖くなっていた。惟広がいたから… 夫に話せない悩みを打ち明け、妻として、母としての苦しみを癒す事が出来た。惟広を失ったら、精神は崩壊してしまうかも知れない。何より、桔梗は、もう心から惟広の事も必要としていた。

理由を求められても言葉に出来ない… そんな思いで惟広と結ばれてしまっていたのだ。

それでも、夫と子に対して、罪の意識が消えるわけではない。だからこそ、それ以来、桔梗にとって、惟広と情を結ぶたびに、それは口癖になっていた。

惟広「またそれが…」

桔梗「私がいる限り、全てを壊してしまう…」

惟広「母と姉がああなったのは、桔梗のせいじゃない。」

桔梗「私なんて… この世から、いなくなればいい。そうすれば、

みんな幸せになれる。惟広殿も、私のようなものではない、貞女の妻を得られる…。私も苦しみから解放される…。」

惟広「お前が死んだら、俺も死ぬ。俺は、もう桔梗なしでは生きられない。」

桔梗「言わないで…。つらいから…。」

桔梗は解っていた。いつまでもこんな関係が続くわけがない事を。こんな事を続けていれば、いつかはバレしてしまう。どんなにうまく隠し通してもだ。常に、「知られる」「か」「知られない」かの二者択一の確率の世界。常に「知られない」で通せるわけがない。当たり前前の事だ。

だからこそ、知られる前にこの関係を終わらせなければならぬ。でも、解っていないながら、ふんざりがつけられない。まさに泥沼の中で桔梗は苦しんでいた。

そして、ついに…

2人の関係に気付いたものが現れた。それは、惟頼の母と姉に通じた女中であった。その女中は、2人の関係を知ると、それを真つ先に2人に報告し、惟広との関係が知れるところになってしまったのである。



## 我が名は女なり

ある日、惟広は、母と姉の由布の末屋敷に、いつものように呼び出されたが、目通りするなり、惟広は、由布にいきなり物を投げつけられた。その顔は怒りに満ち、声を荒げて言った。

由布「おぬしに裏切られようとは思わなんだわ!!!」

惟広「な、何事ですか？」

由布「おぬし、桔梗と通じておつたらう!？」

惟広「な、なんと!？」

由布「とぼけても無駄じゃ!!! すでに報告は受けておる。しかも、男と女の関係にあつたとか。許せん!!! ほんに許せん!!!」

惟広は、バレたと思いつつも、意を決してとぼけ続けた。由布は確信を持っているようだが、認めたら、自分だけでなく桔梗の破滅でもある。それだけは避けなければならない。惟広は、どんなに由布に責められ、たとえ白々しくなっても、桔梗との関係を認めなかった。

惟広「そのようなくだらぬ話なら、もう付き合う必要はない。」

由布「惟頼殿に言つぞ!」

惟広「どうぞ、ご自由に。姉上の錯乱も、そこまでは思わなんだ。」

由布「おのれ惟広!!!」

惟広「では、失礼つかまつる。」

そして惟広は、強引に席を立って屋敷を出て行った。

しかし、怒りの収まらない由布は、すぐさま堀江山城に向かい、惟頼が留守であることをいいことに、ずかずかと桔梗の部屋に真っ直

ぐ入って行った。

由布「桔梗！！ おのれ、不貞のやからめが！！！！」

すると、いきなり由布は、桔梗の頬を平手打ちにした。傍にいた女中が間に入った。

女中「何をなさいます！？」

由布「何をなさいますではないわ！！ この女、夫がありながら、他の男と通じておつたんじゃ！！」

女中「な、なんと！？」

桔梗「！？」

桔梗は、言葉を失い愕然とした。ついに…

しかし、桔梗はすぐに気を強くした。

例え真実でも認めるわけにはいかなかった。

桔梗には、守るべきものがある。

由布「こんな奴、こうされて当然なのじゃ！！」

すると由布は、制止する女中を振り切つて、桔梗にせっかんを始めた。

由布「桔梗、認めよ！！ おぬし、惟広殿と通じておつたらう！！」

女中たちは、由布から飛び出す信じられない事実にも、呆然とそれを見守るしか出来なかった。

けれども、桔梗は開き直っていた。

桔梗「そのような事はしておりませぬ。」

由布「何を白々しい！！　すでに証拠は上がっておるのじゃ！！！」  
卑怯なのは解っていた。

こういう時は、潔くすべきなのも解っていた。

由布が言っている事は真実だ。

真実に背くことは人の道ではない。

けれども認めたら、愛するべきものが全て壊れてしまう。

女として愛した惟広も…

母として愛した子供たちも…

妻として愛した惟頼と築いてきたものも…

自業自得なのだから、自分が悪女の名を着て滅び去る事はもう構わない。

それを弁解しようなどとは思っていない。

けれども、そんな自分のために、愛する者たちを巻き添えにするわけにはいかなかった。

愛する者のために生きるのが女の務め。

それが女の本懐であり、そのために死ぬことは女の本望。

私は、人である前に女である。

桔梗は、心を鬼にして女になった。

我が名は女なり

桔梗は、こうなった時の覚悟は、すでに惟広との関係を持った時から決めていた。

だからこそ、こんなわずかな時間でも意を決する事が出来た。

あとは、女としての本懐を遂げるだけであつた…

桔梗は、どんなに白々しくなっても、どんなに卑怯に見えても、惟広との関係を認めず、黙って由布のせつかに堪え続けた。女になつた桔梗にとって、それは何の苦しみでもなかった。むしろ、これ

で愛する者全てが守れるなら幸せだった。

やがて桔梗は、由布にせつかんされる中で気を失っていた。それに気付いた女中が我に返り、由布を止めて、桔梗を別室に運んだ。

この騒動を聞きつけた惟広が城にかけつけたが、桔梗は、すでに満身創痍で気を失い床に伏せていた。由布は、城を出てすでに自分の屋敷に戻っており、惟広が駆けつけた時には城にはいなかった。

惟広も、まさかこんなに早く由布がこんな大胆な行動を起こすとは思わず、不意を突かれた感じであった。

傍にいた女中が、事の経緯を惟広に話した。

女中「まさか、惟広様。本当に桔梗様と…」

惟広「それはない… それは無い…」

惟広は、力なく肩を落とした。

それを見た女中も何かを察して、それ以上は何も聞かなかった。

惟広（この上は、俺が腹を切って…）

自分が責めを負えば、全てが解決する…

惟広も、そう思い詰めるようになっていた。

しかし、惟広はすぐには腹を切らなかった。未練があったということもあったが、何より、桔梗の事が気かりでまだ死ねなかった。もし、真実が知られてしまえば、桔梗には誰も味方がいなくなる。そうなった時に自分がいなければ…

騒動は、惟頼の知れるところとなり、惟頼は、真偽を確かめるため、

桔梗と由布、そして惟広を呼び出し、事の真相を確かめる事にした。呼び出された惟広は、もしもの時は腹を切る覚悟であった。もちろんそれは、桔梗の命と引き換えにだ。桔梗を生かしてくれるなら、惟広は、喜んで腹を切るつもりであった。

だが、1人では死なない。死ぬ時は、由布も道連れにするつもりであった。由布を残したまま、死ぬことだけは惟広には出来なかった。由布は、とにかく憎き桔梗を葬り去る事しか頭になかった。

そして桔梗は、これを前にして、一通の手紙をしたためていた。それを1人の女中に託した。

桔梗「私にもしもの事があつた時は、これを惟広様に届けてください。」

女中「まさか、桔梗様…」

桔梗「全てはお家のため… 惟頼様、我が子たち、惟広様… 堀江家のためです。」

女中「…解りました。」

桔梗は、安堵の笑みを浮かべると、それから子供たちのいる部屋に立ち寄った。

そして、自分が産んだ子供たちの1人1人を抱きしめた。

子供らは、何も解らず、母のそれを受け入れた。

桔梗（こんな母を許しておくれ… 女である事を捨てられなかった私を…）

そして桔梗は、後ろ髪をひかれる思いを振り切り、惟頼たちの待つ広間へと向かった。

堀江山城の広間には、惟頼を上座にして、すでに由布と惟広が待ち

構えていた。

それぞれが覚悟を秘め、場は異様な空気に包まれていた。桔梗が来ると、惟頼は、広間を4人だけにして、他の者を下がらせた。

惟頼「それでは、始めるとするか。姉上、桔梗が惟広と通じておるとはどういう事じゃ。」

由布「ある日、桔梗に仕える者より密告があつたのじゃ。」

惟頼「…さようか。では惟広に聞く。桔梗は、わが妻じゃ。」

惟広「存じております。」

惟頼「本当に、桔梗と通じておつたのか？」

惟広「そのような事は…ございませぬ。」

由布「嘘をつけ!!」

由布が声を荒げた。

由布「おぬしたちを見た女中は1人2人ではないわ!!」

惟頼「誰と誰が見たのか？」

由布「それは言えぬ。知れば、惟広と桔梗に口封じに殺されてしまつわ。」

惟頼「……」

惟頼は、桔梗の事を信じたかつた。

けれども、惟広の事は、信じ切れていなかった。昔からこういう事は得意なやつ。もしかしたら、桔梗までをも奪われてしまったかも知れない… このような事があると、桔梗の事まで疑心暗鬼になってしまう。

惟頼「桔梗、本当に惟広とは何も無かつたのか…」

桔梗「はい……」

しかし、惟頼は、役目上城を留守にする事は多かった。その間、城代を務めていたのは惟広だ。そういう関係になろうと思えば出来たろうし、それをやられたら防ぎようもない。考えれば考えるほどに疑わしい。何より… 惟頼は、惟広の性格をよく知っていた。特に嘘をついた時の表情や仕草… 今の惟広は、惟頼には、嘘をついているように見えた。

惟頼「桔梗、本当に惟広とは何も無いのだな…」

すると桔梗は、今までに見せた事のない覚悟を決めたすごい目線で、惟頼を見つめた。

桔梗「との、私を信じていただけませぬか。」

惟頼「いや、そのようなわけではないが…」

桔梗「いえ、信じていただけではありません。」

由布「信じられるわけが無からう!!」

桔梗「黙れ! 由布!!」

由布「!?!」

それは、初めての事だった。

桔梗が由布に向かって刃向ったのは、それが初めてだった。

その気迫に由布は驚き、言葉を失ってしまった。

桔梗「私は、堀江のために尽くしてまいりました。その堀江の家を裏切るような事は決まっておりました。されど、こうして疑われたのは、私の不徳のいたすところ。なれば、潔白を証明し、不徳の罪を拭わなければなりません。」

すると桔梗は、胸元から懐剣を取り出した。

惟頼「な、何を…」

桔梗「これが私なりのケジメにござりまする！！」

そして桔梗は、その懐剣を自らの胸元に突き刺した。

桔梗「ぐ…」

惟頼「き、桔梗お！！！！」

惟広「！？」

惟頼と惟広がすぐさま桔梗に駆け寄った。

桔梗「との…申し訳ありませぬ…」

惟頼「桔梗、わしが悪かった！ 疑ったわしが…」

惟頼は、すぐさま懐剣を引き抜いたが、すでに桔梗は虫の息だった。

桔梗「惟広様にも申し訳ありませぬ。これからの堀江の事…お頼み申し上げます…」

惟広「き、桔梗…どの…」

惟広の目に熱いものがあふれた。

桔梗「このような私を…お許し下さい…」

そして、桔梗は息絶えた。

惟頼「桔梗！！！！」

すると惟頼は、怒り狂った表情で由布をにらみつけた。

惟頼「こうなったのも、全てお前のせいじゃ。いい加減な諫言をするからじゃ!!!」

由布「な、何を…」

由布は腰を抜かして動けなくなっていた。

そんな由布に惟頼は刀を抜いた。

惟頼「お前だけは許せぬ!!!」

惟頼は、ためらいなく刀を振り下ろした。

由布「ぎゃああああああああ!!!!!!!!!」

広間は、由布の真っ赤な血に染まり、由布もあつという間に息絶えた。

こうして、全ては終わりを告げた。

桔梗は、全てを終わらせるつもりだった。

終わらせるために、自らの命を賭した。

その思いは、最後にしたためた惟広への手紙に残されていた。

惟広が自分の館に戻ると、そこには桔梗の侍女が待っていて、最後に託された手紙を惟広に渡した。そこには、惟広には生きていて欲しい事、惟頼と子供たちの今後の事、そして堀江家を支えて欲しい事、桔梗の心残りの全てが書き記されていた。

桔梗「私は、もう疲れしました。だから、これで全てを終わりたいと思います。」

惟広「き、桔梗…」

惟広は、手紙を前に泣き伏していた。  
こんなに泣いたのは初めてかもしれないと思うほどに泣いた。

桔梗と由布の死後、間もなく、桔梗を苦しめた母も病でこの世を去った。人々は、それを桔梗の呪いだと言った。そして後世、堀江山城があつた場所は、桔梗ヶ原として伝えられる事になったのである。

## 源頼朝の拳兵

桔梗の死に落胆した惟頼は、もう桔梗のそばを離れたくないという思いから、隠居を決意し、家督を嫡男の正義に譲り、実権は握り続けたものの、実務は全て正義に委ねて京へ上らせ朝廷に出仕させた。その補佐には、惟広をつけ、戦などの時には、惟広を総大将として出陣させるようになった。

惟広は、逆に桔梗のいない塩谷の地に未練はなく、むしろ離れていなかった。惟頼のこの命にためらいは全くなかった。

惟頼は、桔梗と惟広の関係を疑わないではなかった。自分がいない間、何かあったとしてもおかしくない。特に惟広が、女子おんなに人気があり、惟広自身が、女子の扱いに長けていた事も知っている。あつたと思うべきかもしれない。

けれども、これ以上、桔梗の事を汚したくは無かった。桔梗は美しい女であり、良き妻であった。命を賭した事が、その証である。何事かあったとしても、もう関係ない。今は、その良き妻であった桔梗のそばにいたい。それだけだった。

だから、惟広の事も責めないし、恨まない。そう決めていた。思いはそれぞれ違ってはいたが、堀江家は、桔梗の下に再びひとつにまとまろうとしていた。

さて、その頃、京都では政変が勃発していた。京では、院政を敷く後白河法皇と武家最高の実力者である平清盛の対立が続いていたが、治承3年（1179年）11月14日、ついに平清盛がクーデターを起こし、数千騎の軍勢で都を占拠。15日には、当時の閔白であった藤原基房と師家もろいえの父子が官職を剥奪され、17日には、太政大臣藤原もろなか 師長以下39名の後白河法皇の側近が官職を剥奪された。

20日には、後白河法皇自身が幽閉され、翌年の治承4年（1180年）2月には、数えでまだ3歳（満年齢で言えば2歳）の安徳天皇が践祚し、同年4月に即位した。

これに対して、後白河法皇の第三皇子である以仁王が抵抗し、治承4年4月9日、全国の源氏に対して、平氏追討の令旨を發した。同年5月26日には、以仁王は平家に追われて討死するが、この令旨は、全国の源氏を結集させるきっかけとなったのである。

この令旨は、惟頼の下にも届けられていた。惟頼は、拳兵すべきか、全国の政情を見極めてから判断するつもりであったが、平家が源氏追討の動きを見せると、座して討たれるは本望にあらずと決意し、ただちに惟広を呼び、拳兵の意思を伝えた。あとは時期の見極めだけであった。

同年8月、伊豆にあった源頼朝が拳兵し、一度は敗れるも、房総（現在の千葉県）に逃れ、房総の有力士族である千葉常胤や上総広常の協力を得て、10月には武蔵国（現在の埼玉、東京と神奈川県の一部）を勢力下におき、さらに南下して鎌倉に入り、南関東を勢力下に治めた。

それからの頼朝は破竹の勢いであった。

10月20日には、頼朝追討のために平氏より派遣された数万の軍勢を駿河国（現在の静岡県東部）の富士川で破り、11月4日には北関東の常陸国府に入り、5日には北関東の雄で同じ源氏である佐竹氏が金砂城に立て籠もりとこれを攻め、7日には落城。常陸国も勢力下に治め、関東のほぼ全てを掌握した。

これを見た惟頼は、頼朝に従う事を決意した。自分も頼朝と同じように源氏の棟梁として立ち、頼朝が台頭すると、これと対立して関

東支配を目指す事も考えていたが、常陸の佐竹氏が敗れたのを見て、今はこの時流には逆らえないと見たのである。背景には、同じ下野士族である宇都宮氏が、早くから頼朝に恭順していたこともあった。

これより間もなく、惟頼は、惟広を伴い鎌倉に入り、頼朝に恭順の意を示した。

頼朝「遠路はるばる大義であった。聞けば同じ河内源氏であるとか。その堀江殿のご助力がいただければありがたい。以後、よしなに頼むぞ。」

惟頼「はは、ありがたき幸せ。」

こうして堀江家は、頼朝の旗本となり、鎌倉には惟広が出仕するようになった。

さて、この鎌倉への道の途中には、惟頼と惟広の祖父である頼純が討たれた堀江家にとつての因縁の地である上田山があった。

惟頼が鎌倉に向かう途中、ここで一行の足を止め、惟純と堀江十勇士と讃えられ18歳で散った関谷兼通の御霊を弔った。

惟頼は、感慨深げに言った。

惟頼「もし…もしここで頼純公が討たれていなかったら、我ら堀江家は、関東の雄として、今の頼朝殿のようになれていたであろうか…」

惟広「どうだろうか…父上は、よく頼純公が、源氏の棟梁になる夢を持っていたことを話されておられた。あるいは、下野一国くらいは、頼純公と父上の代で支配していたかもしれぬ。」

惟頼「下野一國あれば… 関東を支配できた。」

惟広「本気か？ 兄上。」

惟頼「俺の頭とお前の力があれば出来た。頼朝などに負けはせぬ。全ては時流に敗れたただけだ。」

惟広「なるほど… だが、皮肉な事に、それが全てなようだ。今は

…」

惟頼「……」

祖父の頼純公は、この時代の流れをどう見ているだろうか。惟頼は、そう思いを馳せると、頼純公の無念の声だけしかしないような気がしてならなかった。

そして、惟頼も同じ思いであった…

寿永2年（1183年）2月23日、下野国で野木宮合戦のきみやが勃発する。これは、頼朝の叔父にあたる志田義広が拳兵し、頼朝に反乱したものだ、これに対して頼朝の命を受けた小山氏が謀略を以て義広軍を破り、義広は追放された。

この戦いでは、下野南部の有力豪族である足利氏も加わっていたが、この足利氏は、のちに幕府を開く源氏を源流とする足利氏ではなく、藤原氏を源流とする足利氏で、この戦いをきっかけに衰退し、代わって源氏の足利氏が台頭する事になる。

惟頼と惟広は、この合戦に頼朝側として参戦し、戦功を挙げた。

その後、関東をほぼ手中にした頼朝であったが、それよりも先に京へ上洛を果たした源氏がいた。木曾義仲である。この頼朝と義仲の2人の源氏の棟梁は、その対立を深めていくのである。



## 12歳と7歳の夫婦愛　〜大姫の悲劇〜

叔父の志田義広を破って関東を制した頼朝であったが、寿永2年（1183年）2月、義広は頼朝の追っ手を逃れて木曾義仲を頼り、義仲もこれを保護して、頼朝と義仲の対立が深刻となった。

そもそも源氏の棟梁は2人もいらな**い**と思つていた頼朝にとって、義仲はうとましい存在であつたが、義広を保護した事で、頼朝の怒りは頂点に達した。

だが、ここで源氏同士が争えば、京にある平氏を利するだけで何の得もない。また、より京に近い位置にいた義仲は、その余裕からか頼朝を下に見ており、一刻も早く平氏を討ちたい義仲は、頼朝を相手にするつもりなど毛頭なかつた。

義仲は、信濃国（現在の長野県）の南部にある木曾谷を根拠とする源氏で、頼朝同様、以仁王の令旨をきっかけにして挙兵していた。関東に勢力基盤を築こうとした頼朝に対して、義仲は、木曾谷から北に勢力を拡大し、越後（現在の新潟県）に進出して、これより北陸道を西進した。これは、関東で勢力を拡大していた頼朝との対立を避け、一刻も早く京に向かい平氏を討つ事を優先したためで、関東の上野国（現在の群馬県）には、父の旧領があつたが、頼朝の影響力が薄い北陸に進出したのである。

義仲が、義広を保護したのは単に親類縁者としての情によるものだったが、頼朝の激怒ぶりを見た義仲は、今は平氏との戦いを優先し、頼朝との対立を避けるため、嫡男の義高を人質として頼朝に差し出す事を提案する。義高はこの時まだ数えで11歳。

これには頼朝も驚き、義仲が下手に出た事に気を良くして、同年3月、この提案を受け入れ義仲と和睦する。また、ただ人質として差し出すと、源氏同士の内紛と受け取られ、平氏に対して弱味を見せ

る事になるため、頼朝は、義高を自分の娘の婿として迎える事にしたのだった。

その頼朝の娘を大姫おおひめと言った。この時、まだ数えて6歳。満で言えば5歳で、現代ならば小学校にも上がらない娘が、父の政略のために、11歳の少年と結婚させられたのである。

そして、この結婚は、わずか1年ほどで、悲劇的な結末を迎える事になる…

義仲は、頼朝と和睦して後顧の憂いをなくすと、西に向けて快進撃を見せる。

同年5月11日、越中国えつちゅうのくに（現在の富山県）と加賀国かがのくに（現在の石川県）の国境にある倶利伽羅峠くじかたとうげで、平氏軍10万の大軍を迎え撃った義仲は、平氏軍に夜襲をかけ大勝利を収めた。この奇襲攻撃にさしもの大軍も動揺し、その大半が谷底に落ちて死んでいったという。

義仲は、そのまま北陸道を進撃し、7月25日、平家は安徳天皇を連れて京を脱出。その2日後の27日に義仲が入京し、義仲はついに上洛を果たしたのである。

この2年前に、平氏の最大の求心力であった清盛が亡くなり、10万もの大軍を失った平氏には、もはや京を死守する力はなくなっていた。こうして、京に再び源氏の旗がひるがえったのだった。

これに嫉妬したのが頼朝であった。頼朝は、義仲に先を越された事を悔しがり、このままでは、義仲の下にされてしまう事を恐れた。ところが、そんな頼朝を喜ばせる出来事が勃発する。

義仲と義仲を支援してきた後白河法皇が、皇位継承問題で対立したのである。後白河法皇を擁して快進撃を続けてきた義仲であったが、それにほころびが見え始めたのだった。

この機を逃さず、すかさず頼朝は後白河法皇に接近した。すると法皇も、義仲が平家追討のために西国に向けて出陣し京を離れると、10月には、頼朝に東国支配を認める宣旨（寿永の宣旨）を発し、さらに頼朝に上洛を促したのである。

これで立場を逆転させた頼朝は、すぐさま弟の範頼と義経に軍勢を与え、京の義仲を討つために進軍させた。この軍勢には、惟頼と惟広も加わっていた。

その頃、西国では平家に惨敗を喫していた義仲は京に戻り、義仲は後白河法皇に頼朝追討の宣旨を下すように求めるが法皇は応じず、11月頼朝軍が近江国（現在の滋賀県）に達すると、義仲は法皇を幽閉する暴挙に出て強引に頼朝追討の院宣を引き出し、軍勢を整えた。

しかし、法皇を幽閉した事により、人望を失っていた義仲の下に兵は集まらず、寿永3年（1184年）1月、頼朝軍に宇治川や瀬田の戦いで敗れ、同月20日、頼朝軍の追撃にあつて義仲は討死した。享年31。

これにより、天下の趨勢は頼朝に傾くことになった。

父を失った義高は、頼朝の娘婿から謀反人の子に落ちた。そして頼朝は、ついに義高の殺害をも画策するのである。これを知った7歳になつていた大姫は、同年4月21日、義高に女装させて落ち延びさせた。短い間とは言え、義高と心を通じ合わせていた大姫は、妻として、何としても夫の義高を助けたかった。

だが、事は露見し、激怒した頼朝は、すぐさま追つ手を向けた。

これを聞いた大姫は、何とか義高が無事に落ち延びてくれる事を願つたが、4月26日に捉えられ、そのまま首を打たれたのだった。

義高の享年、わずかに12。

こうして12歳と7歳の幼い夫婦は、悲劇的な終焉を迎えたのだ  
た。

大姫は、この知らせを聞いて嘆き悲しみ、病に伏してしまった。  
これを聞いた頼朝は、なんと、自分が出した命令に従い義高を殺害  
した家来の藤内光澄を、配慮が足りなかったために娘が病になつた  
として斬首し、さらし首にしたのである。  
全てが理不尽と言っしかなかった…

その後、大姫は、ずっと義高の事を思い続けて、良縁を断り続け、  
天皇との婚姻すらも拒み、生涯、義高の妻である事を貫き通して、  
わずか20歳という若さで死去している。  
6歳にして知った愛に生きた美しき女の一生であった。

惟頼と惟広は、範頼と義経に従い京に入り、その軍勢は、そのまま  
平家追討へと向かう事になるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7245w/>

---

塩谷物語(しおのやものがたり)

2011年11月18日02時24分発行